不入岡遺跡群発掘調査概報

不入岡遺跡・沢ベリ遺跡2次調査

平成6年度

倉吉市教育委員会

正誤表

	誤	正
例言　14行	福井　輝雄	福井　輝夫
P 1　21行	のうち15,500㎡については	のうち17,500㎡については
P18　26行	上層より漆器埦が出土している	上層より漆器椀が出土している
P51　9行	として玉・管玉が出土している	として勾玉・管玉が出土している

倉吉市教育委員会 氏寄贈

序

この報告書は国府地区農業集落基盤整備事業(ほ場整備事業)に伴う事前調査として平成5年度、6年度に倉吉市不入岡において実施した埋蔵文化財の発掘調査の記録であります。

不入岡遺跡群では、不入岡遺跡(A・B・C地区)、沢べり遺跡(D地区)、ともに注目される大きな成果を挙げました。

不入岡遺跡では奈良時代から平安時代にかけての整然と並ぶ全国的にみても初めての発見例の大型掘立柱建物群を検出しました。この大型掘立柱建物群の機能については研究者の間でも現在、意見が分かれており、学術的にも極めて重要なものとして注目を集めています。

また、沢べり遺跡では古墳時代後期の古墳群を検出しました。この古墳群では帆立貝式古墳が集中して存在し、古墳の周溝から鹿の子模様の衣装をまとった人物埴輪の全身像が出土しました。不入岡遺跡群ではその他にも縄文時代から中・近世に至る幅広い時代の遺構を検出し、この地域の人々の古来からの営みを感じ取ることのできる重要な遺跡です。

なお、大型掘立柱建物群については工事の予定を変更し、現状で埋め戻しを行った上でほ場整備を行い、遺跡を保存することになっています。これもひとえに地権者の方々の多大なるご理解の賜物と感謝しています。発掘調査は平成7年度まで継続する予定であり、本概報は整理途中での経過報告です。満足すべきものではありませんが、関係者のご利用に供すれば幸甚に存じます。

最後に、地元不入岡地区の方々、地権者の方々をはじめ、調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

倉吉市教育委員会
教育長　小　川　幸　人

鳥取大学附属図書館
<10>0050052711

例　　言

1．本概報は、平成５年度・６年度に倉吉市教育委員会が、国府地区農業集落基盤整備事業（ほ場整備事業）に伴い、倉吉市不入岡で実施した発掘調査の記録である。

2．発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長　小川　幸人（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員　名越　　勉（倉吉市文化財保護審議会会長）
　　手嶋　義之（倉吉市文化財保護審議会委員）

調 査 員　根鈴　輝雄（倉吉博物館学芸員）　　濵田　廣幸（文化課文化財係係長）
　　森下　哲哉（文化財係主任）　　根鈴智津子（文化財係主事）
　　竹宮亜也子（文化財係主事）　　岡本　智則（文化財係主事　６年度）
　　加藤　誠司（鳥取県教育委員会派遣調査員　５年度・文化財係主事　６年度）
　　竹中　孝浩（鳥取県教育委員会派遣調査員）　高取　英雄（鳥取県教育委員会派遣調査員）

調査補助員　山根　雅美

事 務 局　藤井　規昭（教育次長　５年度）　　福井　輝雄（教育次長　６年度）
　　由井洋之助（文化課課長　５年）　　生田　淳美（文化課課長　６年）
　　中原　拓憲（文化課課長補佐　６年度）　　猪口　洋志（文化財係主事）
　　高山　りさ（文化財係主事）　　山崎　朋子（臨時職員）

内務整理　泉　美智子・松田　恵子・世流由美子・妻藤　君江・松嶋あつ子・青戸　千秋・谷﨑　恵子・竹歳　暁子
　　児玉美佐子

調査指導　文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官　松村　恵司
　　奈良国立文化財研究所研究指導部集落遺跡研究室長　山中　敏史
　　鳥取県教育委員会文化課文化財係文化財主事　松田　潔
　　鳥取県埋蔵文化財センター調査指導係文化財主事　長岡　充展

3．現場での調査は、平成５年度は濵田・竹宮・竹中、６年度は竹宮・竹中・岡本が主として行い、他の調査員が補佐した。また、立正大学学生宮川紳・奈良大学学生岡平拓也の援助を受けた。遺構の写真撮影は各調査員が担当した。

4．遺構の実測・図面整理、遺物写真撮影は竹宮・竹中・岡本・山根が行った。遺物実測は森下・根鈴智・竹宮・加藤・高取が行った。

5．遺構測量のための基準杭設置をＡ・Ｂ・Ｃ地区は西谷技術コンサルタント株式会社、Ｄ地区は株式会社ウエスコ倉吉事務所に委託した。遺構測量はＢ地区を西谷技術コンサルタント株式会社、Ｄ地区の一部を株式会社ウエスコ倉吉事務所に委託した。

6．本書の執筆は、調査員が討議し分担して行った。文責については文末に記した。編集は松田が担当した。

7．第１図（地形図）は、建設省国土地理院発行の１：50,000地形図「倉吉」「大山」の一部を複製・加筆したものである。第２図は、平成元年修正測量の１：2,500国土基本図　倉吉市平面図を使用した。

8．挿図中の方位は、特に注記を行わない限り国土座標第Ⅴ座標系の北をさす。

9．本文中における遺構略号は次のとおりである。

ＳＡ：柵列　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝・堀　　ＳＩ：竪穴式住居址　　ＳＫ：土壙　　ＳＸ：埋葬施設

10．調査にあたって、大型掘立柱建物群については多くの方々にご指導ご教示をいただいた。また、出土した人骨については鳥取大学医学部法医学教室　井上晃孝助教授に鑑定していただいた。記して感謝の意を表する。

11．遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

12．調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 1
Ⅲ　調査の概要 …… 4
　1．不入岡遺跡 …… 4
　　⑴Ａ地区 …… 4
　　⑵Ｂ地区 …… 9
　　⑶Ｃ地区 …… 21
　2．沢べり遺跡２次調査（Ｄ地区） … …… 39

挿　図　目　次

第１図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図 …… 3
第２図　不入岡遺跡・沢べり遺跡調査区位置図 …… 4
第３図　不入岡遺跡Ａ地区全体図 …… 7
第４図　大型掘立柱建物群変遷模式図 …… 9
第５図　ＳＢ25･27･28平面図 …… 10
第６図　ＳＢ44平面図 …… 11
第７図　不入岡遺跡出土遺物図 …… 15
第８図　ＳＩ03平面図 …… 17
第９図　不入岡遺跡Ｂ地区全体図 …… 19
第10図　３号墳墓遺構図 …… 29
第11図　不入岡遺跡Ｃ地区全体図 …… 37
第12図　ＳＩ09遺構図 …… 56
第13図　沢べり遺跡全体図 …… 61

Ⅰ　発掘調査に至る経過

平成４年度、国府地区農業集落基盤整備事業(ほ場整備事業)の計画が示され、倉吉市農村整備課から倉吉市教育委員会に埋蔵文化財の有無についての確認がなされた。不入岡地区では昭和50年に宅地造成に伴って沢ベリ遺跡の発掘調査を行っており、弥生時代から古墳時代にかけての住居址と古墳を検出している。事業対象地区はこの沢ベリ遺跡に近接した部分も含む不入岡地区北側の畑地全体に及んでいた。このことから、今回の工事予定地内には当初より埋蔵文化財の存在が十分予想された。

そのため、倉吉市教育委員会は、まず平成４年11月から１工区を対象にトレンチによる試掘調査を行った。その結果、多くのトレンチで柱穴や溝状遺構、住居址を検出し、以前から知られていた堀、古墳状の高まりなどを確認した。このことから工事予定地内には遺跡が存在することが明らかになった。

そこで、倉吉市農村整備課と協議を重ね、止むを得ず工事によって削平される部分について発掘調査を行うこととなった。１工区分を西からA・B・C地区に分け、平成５年度はA地区4,600㎡、B地区11,500㎡、C地区5,900㎡の一部を、平成６年度にはC地区の残りを発掘調査した。

発掘調査の結果、B地区では奈良時代から平安時代にかけての大型掘立柱建物群が発見された。この遺構については保存の必要のある貴重なものとして現状保存の方向で鳥取県農林水産部、倉吉市産業部農村整備課、不入岡共同施工、鳥取県教育委員会と協議を重ねた結果、当初削平する予定であったB地区のうち、大型掘立柱建物群のある8,900㎡については盛土工法に変更することとし、削平せずに耕作土を盛ったうえで工事を行うこととなった。

そして平成５年11月には２工区を対象に試掘調査を行い、弥生時代の竪穴式住居址、古墳の周溝、箱式石棺墓等を検出した。また、遺物も弥生土器から中・近世陶磁器に至る幅広い時代のものが出土した。このことから２工区についても工事対象地区全体にわたって遺跡の存在することが確認され、止むを得ず削平される部分について発掘調査を行うこととなった。この２工区分(D地区)のうち15,500㎡については平成６年度に発掘調査を行った。平成７年度には残り500㎡について発掘調査を行う予定である。

発掘調査は、倉吉市教育委員会が主体となり、鳥取県教育委員会から調査員の派遣を受けて行った。A地区・B地区・C地区の一部については平成５年７月12日～平成６年３月10日に調査を行い、C地区の残りについては平成６年４月18日～平成６年７月８日に行った。D地区は平成６年７月12日～平成７年３月10日に調査を行った。

なお、遺跡名は調査地区全体を不入岡遺跡群とし、A・B・C地区を不入岡遺跡、D地区を沢ベリ遺跡２次調査とした。　(竹宮)

Ⅱ　位置と歴史的環境

不入岡遺跡群は倉吉市街地より2.5km北西に離れた倉吉市不入岡に位置する。四王寺山(標高171.6ｍ)の位置する倉吉市西郊には、大山の火山活動によって形成された大山灰台地の久米ヶ原丘陵が穏やかな起伏をもって連なり、東側に小鴨川の支流国府川が形成した狭い沖積平野が広がる。

その久米ヶ原丘陵の東端の南西から北東にかけて延びる標高20～24ｍ、水田との比高差約５ｍのなだらかな丘陵の尾根上に遺跡は広がる。北には四王寺山を望み、南に小鴨川の支流である国府川が東流している。

不入岡遺跡群のある倉吉市西郊は、倉吉市のなかでも遺跡が集中している地域である。弥生時代の遺跡は中期以降、久米ヶ原丘陵及び向山丘陵の西側に展開する丘陵上に多く営まれる。沢ベリ遺跡の住居址群は弥生時代後期であるが、弥生時代後期の集落としては遠藤谷峯遺跡(23)・白市遺跡(24)・中峯遺跡(27)など多数が確認されている。

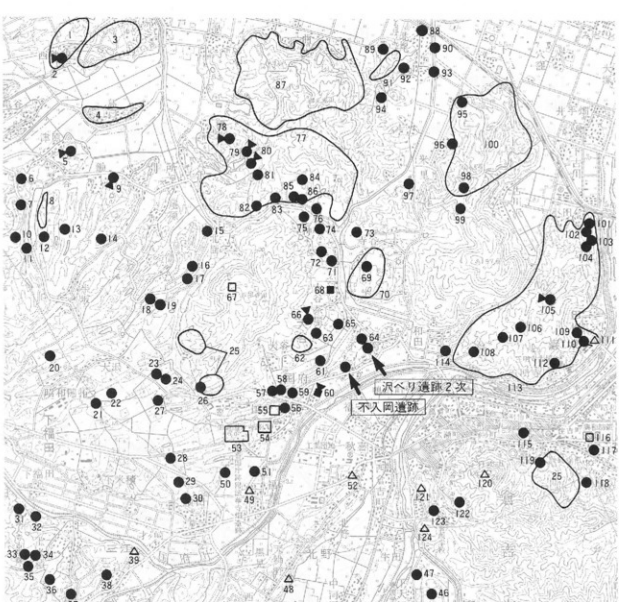
倉吉平野を中心とした古墳の状況は、前期古墳は東郷池周辺及び小鴨川の支流国府川の左岸に多く分布し、後期になると向山丘陵、四王寺山周辺、大平山山麓などに直径10m前後の小円墳からなる古墳群が多く分布する。後期古墳をみると、高鼻2号墳(9・全長26m)・大塚山古墳(5・全長52m)といった前方後円墳が知られる。小林古墳群(63)・イザ原古墳群(65)は沢ベリ遺跡と谷を挟んで四王寺山麓に位置しており、これらは古墳時代後期の円墳群として沢ベリ遺跡との関連が重視される。また、帆立貝式古墳としては芸才寺1号墳(123・全長24m)・野口1号墳(全長24.3m)・家ノ上1号墳(全長33m)・下種8号墳(全長31m)・上種西14号墳(全長36m)がある。沢ベリ遺跡から出土した人物埴輪と同様の人物埴輪を出土した土下古墳群は、沢ベリ遺跡から3.5km北東に位置し、約270基の小円墳群からなる。土下211号墳(円墳・直径16.5m)では鹿埴輪(国指定重要美術品)、鹿の子模様の衣装をまとった人物埴輪が出土している。

奈良時代になると久米ケ原丘陵上には、伯耆国庁跡(53・国指定史跡)・伯耆国分寺跡(54・国指定跡)・伯耆国分尼寺跡と考えられる法華寺畑遺跡(55・伯耆国庁跡に付して国指定史跡)が近接して存在しており、伯耆国の政治・文化の中心地となる。不入岡遺跡はその同一丘陵の東端に位置しており、伯耆国庁跡から北東に1.5km と近接した位置にある。伯耆国庁跡は発掘調査によって規模、内郭の建物の配置などが明らかになっており、全国の国庁研究の中で重要な位置を占めている。四王寺山には貞観9(867)年に建立された四王寺跡(67)がある。

また、B地区とC地区の間には、不入岡の石仏(県指定保護文化財)がある。高さ1.02mの蓮弁形の石の上に阿弥陀如来像、その下に如来を拝んでいるような形の僧の姿が彫られている。像には「永和元年…」の銘があり、年代(1375年)の確かな古い石仏である。また、近隣の中世墳墓としては打塚遺跡(58)が発掘調査されている。

(竹宮)

1	西穂波古墳群	17	一反半田遺跡	33	奥田遺跡	49	今倉城跡	65	イザ原古墳群
2	西穂波16号墳	18	コザンコウ遺跡	34	笑ヶ平遺跡	50	島掛遺跡	66	大谷大将塚古墳
3	瀬戸古墳群	19	道祖神峰遺跡	35	後中尾遺跡	51	今倉遺跡	67	四王寺跡
4	鳥遺跡群	20	昭和開拓遺跡	36	後口谷遺跡	52	北ノ城跡	68	三度舞墳丘墓
5	大塚山古墳	21	大道谷遺跡	37	福本家ノ上古墓	53	伯耆国庁跡	69	屋宮山9号墳
6	清水谷尻1号墳	22	大沢前遺跡	38	上野遺跡	54	伯耆国分寺跡	70	屋宮山古墳群
7	清水谷古墳群	23	遠藤谷峯遺跡	39	砦跡	55	伯耆国分尼寺跡	71	栗栗古墳群
8	頭根後谷遺跡	24	白市遺跡	40	津田峰遺跡	56	宮ノ下遺跡	72	上神大将塚古墳
9	高鼻2号墳	25	古墳群	41	後口野1号墳	57	古神宮古墓	73	西前遺跡
10	二タ子塚遺跡	26	大谷後口谷墳丘墓群	42	八ッ塚古墳群	58	打塚遺跡	74	上神猫山遺跡
11	郊家平古墳群	27	中峯遺跡	43	野畑古墳群	59	掘塚遺跡	75	東孫岡古墳
12	東鳥ヶ尾古墳	28	福田寺遺跡	44	大宮古墳	60	国分寺古墳	76	トドロケ遺跡
13	大仙峯遺跡	29	岩屋遺跡	45	東鴨遺跡	61	中尾遺跡	77	上神古墳群
14	大山遺跡	30	矢戸遺跡	46	山際古墳群	62	大谷古墳群	78	上神45号墳
15	イキス遺跡	31	阿弥大寺墳丘墓群	47	大畑遺跡	63	小林古墳群	79	上神44号墳
16	取木遺跡	32	下小垣遺跡	48	市場城跡	64	沢ベリ遺跡	80	上神48号墳



第1図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

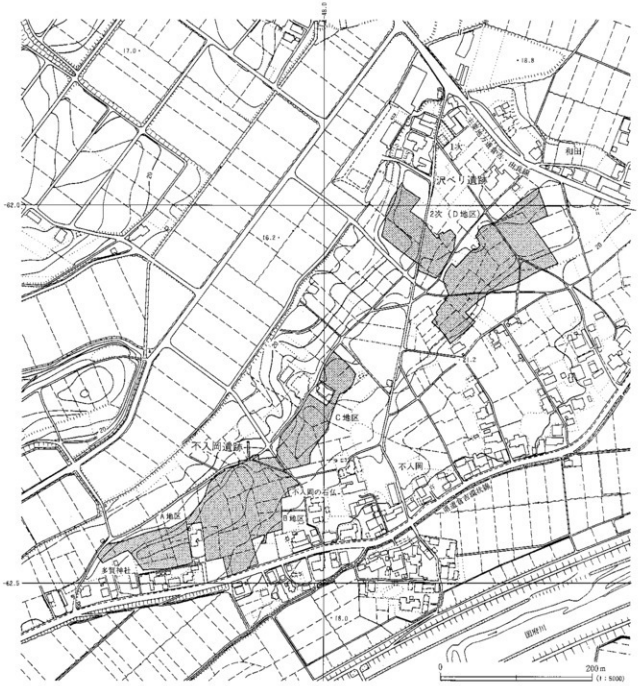
81 上神51号墳	90 北尾遺跡	99 米里第2遺跡	108 向山309号墳	117 松ヶ坪遺跡
82 上神119号墳	91 北尾古墳群	100 土下古墳群	109 上東水遺跡	118 弥平林1号墳
83 クズマ遺跡	92 天王山遺跡	101 小田銅鐸出土地	110 養水古墳群	119 梅田遺跡
84 桜木遺跡	93 島遺跡	102 向山古墳群縫口支群	111 田内城跡	120 打吹城跡
85 谷畑遺跡	94 島古墳群	103 向山古墳群宮ノ峰支群	112 三明寺古墳	121 四十二丸城跡
86 西山遺跡	95 土下129号墳	104 向山古墳群堤谷支群	113 向山古墳群	122 高畔古墳群
87 曲古墳群	96 船渡遺跡	105 向山6号墳	114 平ル林遺跡	123 雲才寺1号墳
88 堤屋敷遺跡	97 米里銅鐸出土地	106 三明寺大将塚古墳	115 山名氏館跡推定地	124 赤岩山砦跡
89 八幡神社経塚	98 米里第1遺跡	107 長谷遺跡	116 大御堂廃寺	

Ⅲ　調査の概要

1．不入岡遺跡

(1)　A地区

A地区は、東西に延びる遺跡群の中でも最も西に位置する。調査を行ったのは丘陵の北斜面になる。調査の結果、A地区で検出した遺構は、竪穴式住居址２棟、掘立柱建物８棟、埋葬施設３基、溝２条であった。



第２図　不入岡遺跡・沢べり遺跡調査区位置図

▷ＳＩ01（北東より）

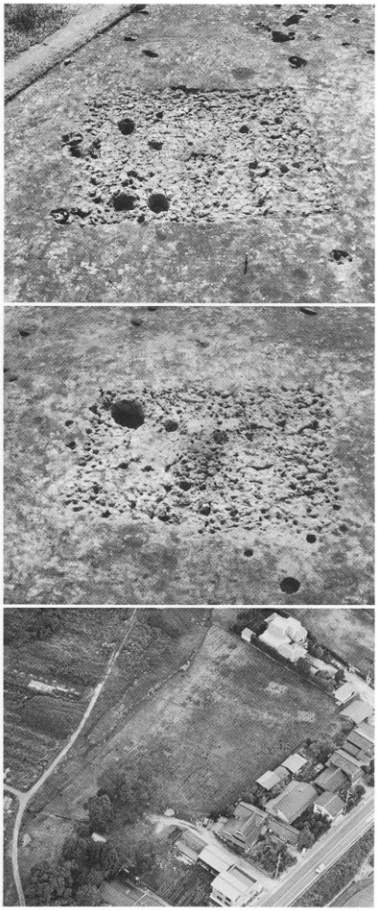
竪穴式住居址２棟は調査区の北東端に隣接して位置していた。

ＳＩ01の平面形は北西から南東にかけて長い長方形で、長軸5.9ｍ・短軸5.0ｍ、床面積29.5㎡を測る。住居内の北側は浅いテラス状になっていた。遺構検出面から床面までの深さは浅く、東隅で10cm、西隅で５cmである。柱穴は南東辺側の短軸に２本確認された。住居のほぼ中央は浅く掘りくぼめられており（1.0×0.6ｍ）、焼土面を確認している。

▷ＳＩ02（北東より）

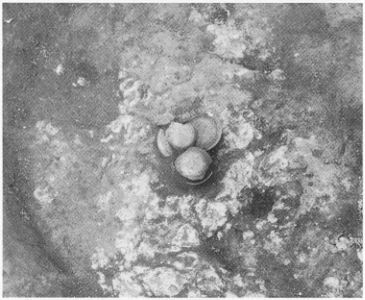
ＳＩ02はＳＩ01の北側９ｍに位置する。平面形はＳＩ01と同じく北西から南東にかけて長い長方形で、長軸5.8ｍ・短軸4.3ｍ、床面積24.9㎡を測る。やはり遺構検出面から床面までの深さは浅く、東隅で５cmである。柱穴は検出されていない。住居のほぼ中央では焼土面（2.9×1.2ｍ）を確認しており、南隅には貯蔵穴（底面0.9×1.1ｍ）が作られていた。

ＳＩ01とＳＩ02の出土遺物は、土師器坏・甕・甑、須恵器坏蓋・坏身・甕がある。住居址の年代はこれらの遺物からいずれも７世紀後葉と考えられる。



▷不入岡遺跡Ａ地区

（全景空中写真　南西より）



◁掘立柱建物（手前よりＳＢ63･62･61　南より）

掘立柱建物は２棟の住居址の周辺を中心に検出しており、これに伴うものであると考えられる。建物配置に規則性は認められない。掘立柱建物は梁行１～２間で、1.6～2.8ｍ、桁行２～４間で2.0～3.7ｍの規模である。ＳＢ63は総柱建物であった。柱穴の掘り方は多くが円形で、ＳＢ61･62は方形であった。柱穴の大きさは20～80㎝、遺構検出面からの深さは10～40㎝ある。

出土遺物は土師器、須恵器の細片がある。

◁埋葬施設（上：ＳＸ01須恵器出土状況　南より，下：ＳＸ01完掘状況　西より）

ＳＸ01は調査区の西端で確認された。著しく削平されており、耕作土を除去する際に板状の石材が多く散乱していたことから本来は石棺墓であったと考えられる。周囲には径5.8ｍの半円形の溝が掘られており、これはＳＸ01に伴う周溝であると考えられる。

その周溝の中心からは須恵器坏蓋・坏身が供献された状態で出土しており、この位置に埋葬があったと考えられる。また、周辺では土師器甕が出土しており、これらの出土遺物からＳＸ01は住居址とほぼ同時期の７世紀後葉のものと考えることができる。

また、土壙墓２基（ＳＸ02･03）を調査区南西斜面で検出した。これらは東西に近接している。ＳＸ02は不整形な方形のもので、長さ1.6ｍ・幅0.7ｍを測る。ＳＸ03は隅丸方形を呈し、長さ1.6ｍ・幅0.7ｍある。出土遺物はＳＸ02で鉄片、ＳＸ03で陶器片が出土している。

（竹宮）

第３図　不入岡遺跡Ａ地区全体図

(2)　B地区

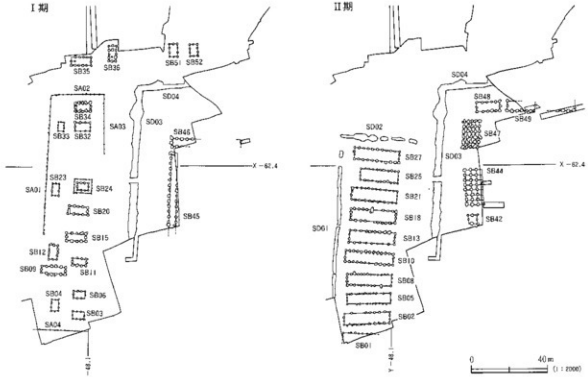
B地区はA地区の東側に隣接しており、さらにその東側にはC地区が隣接する同一尾根上に位置する。不入岡遺跡群の中でも最も標高が高く、最高位で標高24ｍを測る。調査は尾根筋の両斜面について行った。丘陵頂部はなだらかであるが、丘陵裾部に至ると急斜面で低くなる地形である。

調査の結果、B地区で検出した遺構は掘立柱建物50棟、溝23条、柵（塀）4列、竪穴式住居址1棟、中世墳墓2基、埋葬施設3基、土壙7基であった。

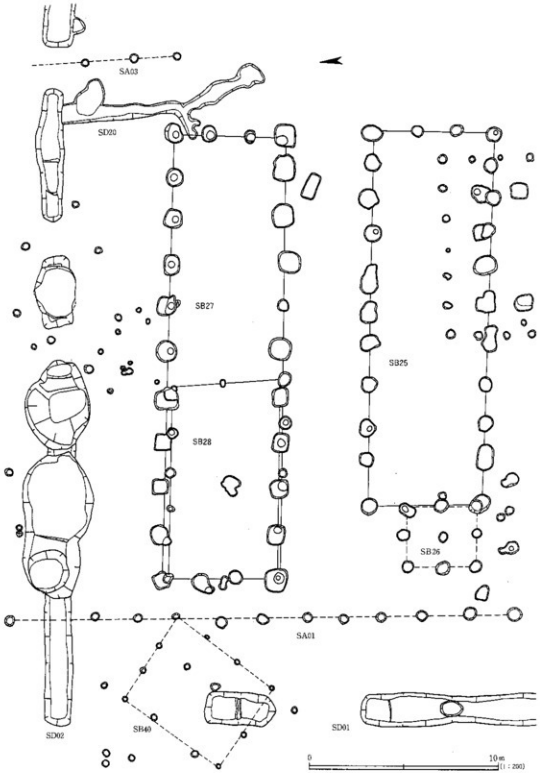
掘立柱建物群

B地区では掘立柱建物を50棟検出している。これらは遺構の主軸方向・切り合い関係から大きくA群・B群の2群に分けられる。A群（SB16・30・39・40）はSB40が最小の建物で梁行2間（5ｍ）・桁行3間（5.9ｍ）あり、最大でSB30梁行5間（10.7ｍ）・桁行5間（10.9ｍ）の総柱建物である。これらは区画施設を伴わず、その主軸方向は南北から40～60°振っており、7世紀代のものと考えられる。B群は区画する溝や柵（塀）を伴い、奈良時代から平安時代のものである。B群の建物群は遺構の主軸方向・切り合い関係から大きく二時期に分けられる。なお、今回検出した掘立柱建物はいずれも数回の建替が認められる。各時期を示す良好な遺物は出土していないが、今回は、B群の2時期をⅠ期（8世紀前半）・Ⅱ期（8世紀後半～9世紀）として、その変遷の概略を報告する。

〔Ⅰ期〕　東西30ｍ・南北120ｍの柵（塀）（SA01～04）で囲まれた区画内に掘立柱建物が配置されており、南北棟1棟と東西棟2、3棟からなる4群が認められる。その東には区画溝のSD03・04で囲まれた一画があり、内側には鍵状に配列された長大な建物で南北棟のSB45、東西棟のSB46がある。また、柵（塀）・溝で区画された敷地の北側にも4棟の建物が2棟ずつまとまって存在する（SB35・36，C地区SB51・52）。このうちSB36・51・52は南北棟で、SB35は東西棟である。



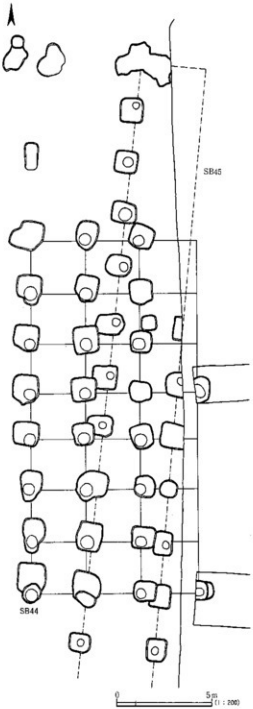
第4図　大型掘立柱建物群変遷模式図



第5図　SB25・27・28平面図

〔Ⅱ期〕　Ⅰ期の柵（塀）に代わって西側と北側に区画溝（ＳＤ01・02）が掘られ、東西約51ｍ・南北105ｍ以上の敷地が設けられる。区画溝に囲まれた敷地には10棟の長大な東西棟の掘立柱建物群を発見した（ＳＢ01・02・05・08・10・13・18・21・25・27）。これらは梁行６ｍ・桁行24ｍ前後の規模でほぼ大きさが揃う。建物は東妻の柱筋を揃えてほぼ等間隔に並列された規則的な配置をとっており、その間隔は4.6ｍと狭い。これらの大型建物群のなかには北側柱列と南側柱列とで柱間が違うものもあり、柱穴間距離もばらつきが大きい。柱筋は必ずしも直線状に配置されておらず、これらの大型掘立柱建物は規模の割には簡易な建物であったと考えられる。また、建替の際には柱穴を当初の内側に配して、規模を縮小している（ＳＢ14・19・22・28）。東側のＳＤ03・04で囲まれた一画には、Ⅰ期の建物に代わって掘立柱建物５棟（ＳＢ42・44・47・48・49）を発見した。そのうち、２棟（ＳＢ44・47）は南北棟の総柱建物であり、西側の柱筋を揃えて直列する規則正しい建物配列となっている。

今回の発掘調査で検出した遺構のうち特に注目されるのはⅡ期の大型掘立柱建物群で、これは全国的にも例のない遺構である。この機能については意見の別れるところであり、考えられるものとしては「馬房」・「物資収納管理施設」・「宿舎」・「工房」などが挙げられるが、当遺跡の立地条件、過去の調査例から考えると物資収納管理施設、つまり伯耆国の管轄下にあった調・庸等の物資の集積地であった可能性が最も高いと考えられる。詳細については今後、検討を行って明らかにしていきたい。



第６図　SB44平面図

◁ＳＢ24（東より）

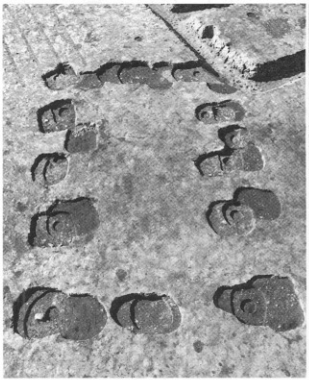
Ⅰ期の掘立柱建物。北から２群目の北側の東西棟の建物である。梁行２間（4.0ｍ）・桁行３間（5.9ｍ）であり、１回の建替が認められる。建替の際、柱穴は一辺50㎝の方形から径50㎝の円形へ変わる。建物の周囲にはピットが巡り、柵（塀）があったと考えられる。ピットは直径10㎝・深さ10㎝の円形の掘り方を有する。柵（塀）が巡らされていたことからこの建物は特に中心的な存在の建物であったと考えられる。

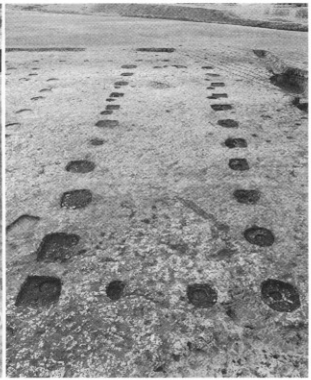
▽ＳＢ34（東より）

Ⅰ期の柵（塀）に区画された建物のうち最も北に位置する東西棟の建物。梁行２間（4.6ｍ）・桁行３～４間（8.0ｍ）である。建替は３回認められ、当初、桁行３間であったものが、建替の際に４間に変わっている。柱穴は少しずつずらしながら掘られており、柱穴による埋土の違いが観察できる。

▽ＳＢ27・28（東より）

Ⅱ期の大型掘立柱建物のうち、最も北に位置する。梁行３間（6.0ｍ）・桁行10間（23.8ｍ）であるが、柱間は等間ではない。柱穴掘り方は60～100㎝で方形や円形を呈し、統一性がない。遺構検出面からの深さは30㎝程度である。２回の建替が認められ、２回目には規模を約半分に縮小しており（ＳＢ28）、梁行２間（6.0ｍ）・桁行４間（10.5ｍ）となっている。





▷ＳＤ03・04（北より）

Ⅰ期・Ⅱ期において東側の建物群を区画する溝である。幅４ｍ・深さ1.4ｍを測る。掘り方は逆台形を呈し、床面は平坦である。周囲には通路、土塁のような施設は見られなかった。ＳＤ03は北端より95ｍ南まで、ＳＤ04は西端より28ｍ東まで検出している。

▷ＳＢ45・46（北より）

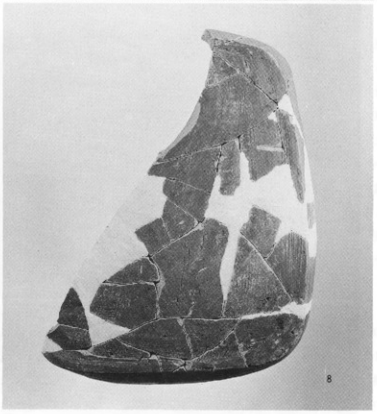
Ⅰ期の鍵状に配された長大な掘立柱建物。いずれも全形は検出できていない。ＳＢ45は南北棟で梁行２間（3.9ｍ）・桁行13間以上（41.2ｍ以上）ある。ＳＢ46は東西棟で梁行２間（3.9ｍ）・桁行４間以上（11.0ｍ以上）である。柱穴の掘り方はいずれも方形で一辺140㎝と大型であり、遺構検出面からの深さも100㎝前後と深く掘られている。柱痕跡の分かっている柱穴もあり、直径30㎝程度の丸材の痕跡を検出した。

▷ＳＢ44（北より）

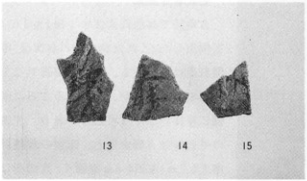
Ⅱ期の総柱建物。今回検出した２棟のうち南側の１棟である。南北棟で梁行３間（9.0ｍ）・桁行７間（18.2ｍ）、床面積は163.8㎡ある。柱穴は最初一辺150㎝の方形に掘るが、建替の際に直径80㎝の円形に変えて南にずらして建てている。ここでは柱痕跡を明瞭に検出しており、直径60㎝の丸材を使用していたことが分かっており、総柱建物にのみ特に大型の柱材を使用している。

◁ＳＢ47（西より）

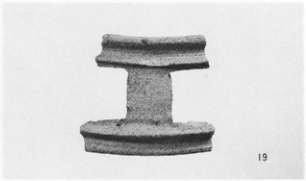
Ⅱ期の総柱建物でＳＢ44の北側12ｍに西側柱筋を揃えて位置する。梁行４間（8.1ｍ）・桁行５間（14.0ｍ）、床面積は113.4㎡ある。建替はわずかずつ軸をずらして４回と頻繁に行っている。遺構検出面からの柱穴の深さは20～30cm程度と比較的浅い。



〔出土遺物〕　遺物の出土量は少ない。遺跡の保存を前提として柱穴の掘り下げを一部に限ったこともあり、その多くが区画溝の埋土中から出土した土器類である。出土遺物は土師器坏・皿が多く出土し、須恵器坏・埦などが中心であるが、転用硯・円面硯もある。これらは伯耆国庁編年第１段階から第３段階のものである。また、大型容器の蓋と考えられる平面形が長方形の特異な土師器８も出土している。墨書土器では土師器坏が溝から出土しており、文字の判読できるものとしては「勝」と書かれた土師器坏片14がある。さらにＣ地区の表土中から「三宅」と墨書された土師器皿25がほぼ完形で出土している。

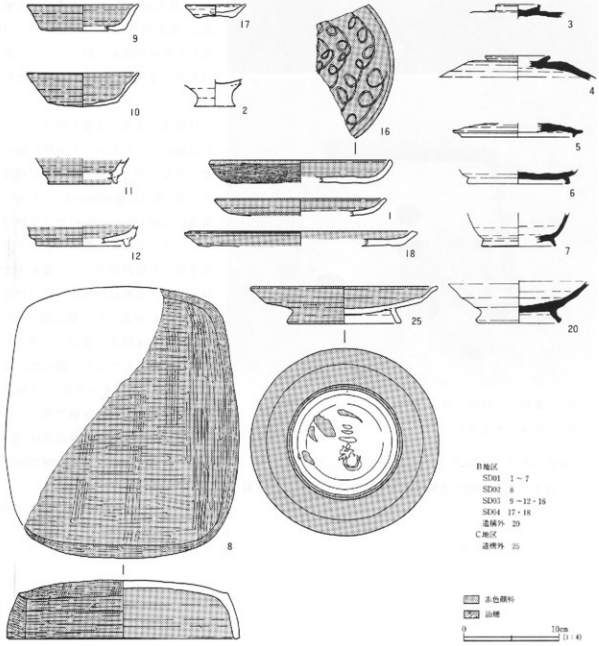


△墨書土器

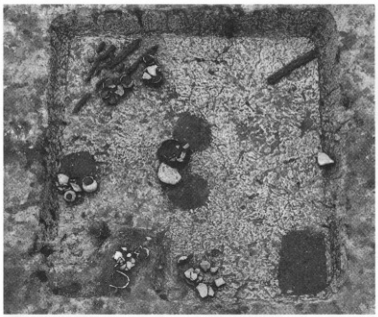


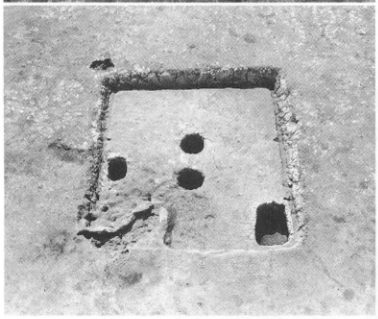
△円面硯（1：2）

（中央の土器片は「□勝□」と読める　1：2）



第７図　不入岡遺跡出土遺物図





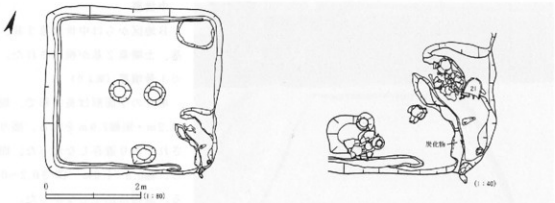
△SI03（遺物出土状況　東より）
▽SI03（完掘　東より）

竪穴式住居址

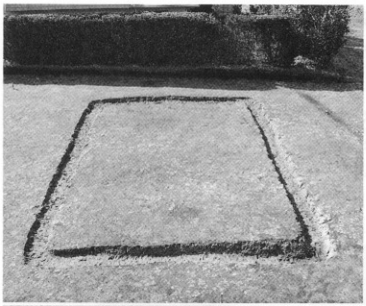
B地区では竪穴式住居１棟（ＳＩ03）を検出した。これは調査区の南西端、南側斜面に位置する。今回の調査では１棟のみ検出したが、調査区のさらに南側に集落の広がる可能性がある。住居の平面形は方形を呈し、床面の規模は南北3.7ｍ・東西4.0ｍを測り、床面積は14.8㎡ある。壁高は北西隅で20㎝を測る。主柱穴は２本で住居中央に設けられる。住居北西隅、南辺中央には土壙があり、炭化材が出土した。住居内には炭化した木材が倒れており、この住居址は火災によって焼失したものと思われる。

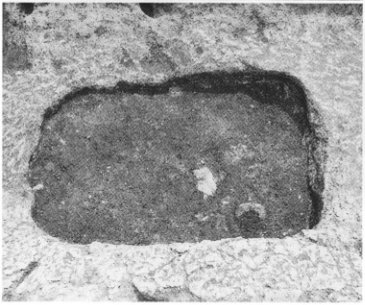
住居址の南東では竈を検出した。これは地山の土を左右に土手状に盛って作ったもので、15㎝の高さまで確認している。焚口は幅が20㎝あり、左袖には板状の石材（30㎝×15㎝）が立て掛けられていた。石材には煤が付着しており、火を受けた痕跡があった。竈本体は幅30㎝あり、奥壁は住居址の壁を利用し、85㎝の奥行があった。竈は幅15㎝の煙道を住居南東隅まで延ばし、煙を戸外に出すようにしていた。竈内部には灰混り土・焼土が詰まっており、土師器甑21・甕が据えられた状態で出土していた。出土遺物は他に土師器高坏・壺・小型丸底壺が出土しており、出土した土器から５世紀後半のものと思われる。山陰地方では竈の検出例は少なく、出土した長胴形の土師器甕22も在地系の土器とは異質なもので注目される。

（竹宮）



第8図　SI03平面図





中世墓

B地区からは中世墳墓２基、火葬墓１基、土壙墓２基が検出された。

◁１号墳墓（東より）

墳丘の平面形は長方形で、規模は長軸11.2ｍ・短軸7.9ｍを測る。盛り土は削平されており遺存しなかった。周溝は全周し、幅0.8～1.0ｍ・深さ0.2～0.3ｍを測る。遺物は出土しなかった。

◁２号墳墓（東より）

墳丘の平面形は長方形で、規模は長軸11.4ｍ・短軸7.1ｍを測る。盛り土は削平されており遺存しなかった。周溝は墳丘を全周し、幅1.0～1.5ｍ・深さ0.4～0.5ｍを測る。墳丘の中央からやや東よりの位置で南北で延びる溝を検出した。これは以前の周溝で、墳丘が東方向に拡張されたものと思われる。拡張前の墳形は方形で、規模は長軸7.2ｍ・短軸7.0ｍであった。周溝からは五輪塔の部材が転落した状態で２点出土している。

◁２号墳墓埋葬施設（北より）

周溝の北西部から埋葬施設１基が検出された。平面形は隅丸方形で、規模は長軸125㎝・短軸69㎝、深さ27㎝を測る。北西部上層より漆器塊が出土している。

（竹中）

第９図　不入岡遺跡Ｂ地区全体図

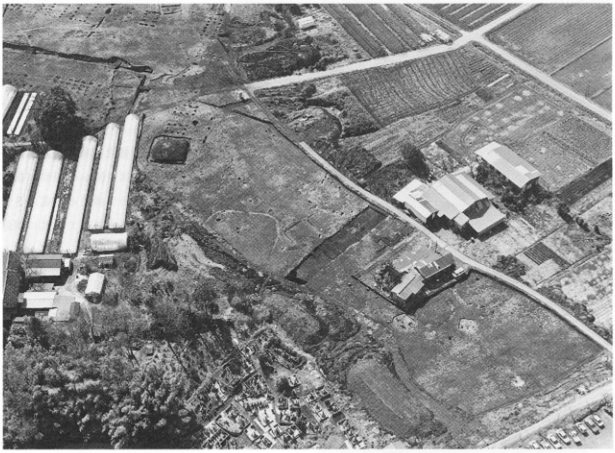
(3) C地区

C地区は不入岡遺跡の中では北東端に位置し、B地区の東側に隣接する。調査区の南東には不入岡地区の集落が広がり、その北には地区の共同墓地がある。調査は丘陵の頂部から北斜面にかけて行った。

調査の結果、C地区で検出した遺構は掘立柱建物12棟、柵(塀)4列、古墳3基、中世墳墓11基、その他の埋葬施設131基、竪穴式住居址2棟、大型の堀を含む溝5条、落し穴2基を含む土壙12基であった。

掘立柱建物

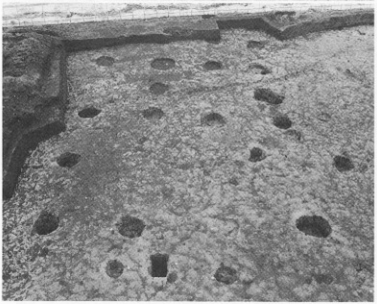
C地区では掘立柱建物を12棟検出している。そのうちSB51～58の8棟はB地区に近接した調査区南端に位置しており、SB68～71の4棟は調査区北側にあった。二者は125mの距離をもって離れており、特に関連性はないものと思われる。南側に位置するSB51～58の8棟については主軸を南北、あるいは東西にとっており、SB51～53・57・58の柱穴は径70～130cm・深さ90cmで、円形から方形の掘り方を有する。この柱穴の形状はB地区で検出した掘立柱建物群B群の柱穴によく似ており、同時代のものと判断できる。また、SA08はこの掘立柱建物群の北限を示していると考えられるものである。



△不入岡遺跡C地区（空中写真　東より）

◁ＳＢ52（北より）

梁行２間（4.2ｍ）・桁行３間（6.1ｍ）の南北棟掘立柱建物。柱穴掘り方は径130㎝・深さ90㎝の円形から方形を呈している。Ｂ地区掘立柱建物群Ｂ群の建物の柱穴によく似ており、建替も認められる。建物の位置からＢ群Ⅰ期の掘立柱建物の一つと考えられる。



◁ＳＢ57・58（北より）

ＳＢ57は梁行２間（4.2ｍ）・桁行３間（6.2ｍ）の東西棟掘立柱建物。ＳＢ58は全形は検出できていないが、梁行２間以上（4.2ｍ以上）・桁行３間以上（5.7ｍ以上）の掘立柱建物である。いずれも径70㎝・深さ90㎝の円形の掘り方を有する。この２棟とその北のＳＢ55・56は西側柱筋を揃えて南北に規則正しく配列されている。

◁墨書土器

３号墳墓下部、ＳＢ53の７ｍ北側から出土した。表土中からの出土で、直接遺構から出土したものではない。この墨書土器25はほぼ完形の高台の付く土師器台付皿である。口径20㎝・器高４㎝を測り、全面に赤色顔料を塗彩する。伯耆国庁第２段階、８世紀末から９世紀前半のものと考えられる。文字は皿の裏面に縦書きしてあり、「三宅」と読むことができる。

（竹宮）

埋葬施設群

C地区からは、弥生時代から近代にかけての数多くの墓が検出された。墓のほとんどは土壙墓だが、副葬品を伴うものは多くない。また墓壙内には比較的酸性度が強い土壌である黒ボクが流入していたため、遺骨が残存していたものもわずかである。しかし遺構が集中する部分は五輪塔の散布が密な地域で、調査前から多くの中世墓の存在が予想されたことから、周知の土壙墓に形状が類似しているものはすべて土壙墓とした。内訳は、古墳3基、箱式石棺墓2基、木棺墓14基、中世墳墓11基、火葬墓7基、土壙墓108基である。以下、それぞれについての概要を述べる。

古墳3基はいずれも円墳で、遺跡の北西部で集中して検出された。墳丘及び主体部は削平されており遺存しないが、2号墳から4基、3号墳から3基の周溝内埋葬施設が検出されている。周溝出土遺物から6世紀代に造られたものと思われる。

箱式石棺墓からの副葬品はないが、2基とも古墳に近接して造られていることから古墳に関連する埋葬施設の可能性が強いといえる。

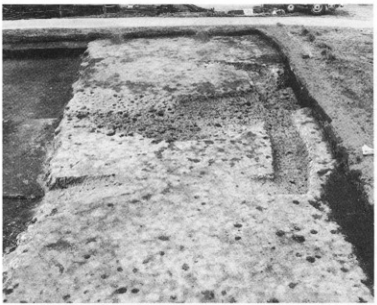
木棺墓14基のうち副葬品が出土したものは2基で、SX88からは6世紀末に比定される須恵器坏蓋が2個、SX90からは7世紀前半に比定される須恵器坏身が1個出土している。このことから、その他の木棺墓の時期もほぼこの時期に並行すると考えられる。

中世墳墓11基のうち、墳丘が遺存するものは1基(3号墳墓)、周溝と埋葬施設が確認されたものは3基(4号・9号・13号墳墓)で、残りの7基は周溝のみが確認されたものである。埋葬施設はすべて土壙墓であるが、土壙に直葬されたと思われるものは2基(4号・13号墳墓)、蔵骨器が埋置されていたものは1基(9号墳墓)であった。墳墓の築造時期であるが、3号墳墓の周溝から出土した五輪塔の形態が14世紀代のものであることから、その他の墳墓もこれと前後する時期と考えられる。ちなみに3号墳の南西約35メートルの位置にこれとほぼ同形の墳墓と予想される高まりがあり、その墳丘上には、「永和元年…」の銘をもつ「不入岡の石仏」(県指定保護文化財)が安置されている。永和元年は北朝系年号で1375年にあたり、このことも築造時期の妥当性を裏付けるひとつの論拠となろう。

火葬墓7基は次の3形態に分類される。①土壙を掘り、そのなかで直接荼毘に付したもの(SX12・30・129)、②土壙を掘り、底部に石を敷き詰め、そのうえで荼毘に付したもの(SX08・127)、③土壙を掘り、底部と側面を平石で囲い、そのなかで荼毘に付したもの(SX123・126)で、いずれも土壙底或いは石材に火を受けた痕跡がある。埋土中からは骨片とともに炭化物が出土していることから、火葬後集骨を行わずにそのまま埋葬された墓と思われる。副葬品は出土していないが、SX127の敷石として五輪塔が使用されていたことから、中世以後に造られた墓といえる。

土壙墓108基のうち副葬品が出土したものは12基ある。このうちSX97・104・105から弥生土器が出土している他は、SX54・56から土師質土器皿が、SX29・32・34・49・51・56から古銭が出土するなど中世以降の遺物が多い。出土した古銭は、古くは1078年初鋳の「元豊通宝」、1174年初鋳の「淳熙元宝」から、新しいもので1736年初鋳の「乾隆通宝」、明治7年(1874)鋳造の一銭銅貨まで多種に及ぶことから、中世以降長い期間にわたって土壙墓群が形成されていったと考えられる。

規模、形態など個別の遺構についての詳細な資料は本報告書に委ねるが、弥生時代から中近世を経て近代に至る墓制の変遷を知る好資料が得られたといえる。



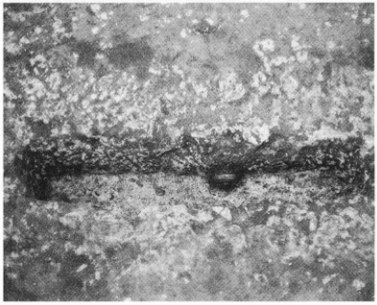
〔古墳〕

◁１号墳（南東より）

北部、東部は調査区外のため未調査。また西部はＳＤ29に切られているため古墳の南側の一部が検出されたに止まるが、残存する部分から墳丘の直径が15ｍ程度の円墳と推定される。周溝は幅2.4～3.3ｍ・深さ0.1～0.5ｍを測る。埋葬施設は検出されなかったが、周溝からは円筒埴輪と壺形埴輪の小片が多量に出土した。

◁２号墳（北東より）

西部は調査区外のため未調査だが、検出された部分から墳丘の直径が11ｍ程度の円墳と推定される。周溝は幅0.8～1.1ｍ・深さ約0.1ｍを測る。周溝内埋葬施設として４基の土壙墓が検出された。周溝の埋土中からは土師器台付埦26が出土している。



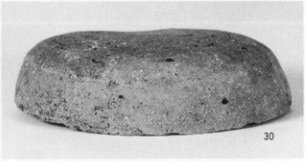
◁２号墳２号埋葬施設（北東より）

２号墳周溝の北東部に位置する。平面形は長方形で、規模は長軸171㎝・短軸32㎝、深さ46㎝を測る。遺構の中央部西側から、脚部のかけた須恵器高坏27が口縁部を西に向けた状態で出土した。

▷ 3号墳（北東より）

北西部は調査区外のため未調査だが、検出された部分から墳丘の直径が13m程度の円墳と推定される。周溝は幅1.0～1.5m・深さ約0.1mを測る。周溝内埋葬施設は3基の土壙墓が検出された。2号埋葬施設の供献土器として須恵器坏蓋30が出土している。また周溝の埋土中からは土師器甕・高坏29・小型丸底壺28の他、家形埴輪の破片が出土している。

27

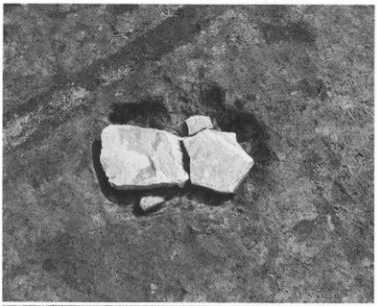

30

26

29

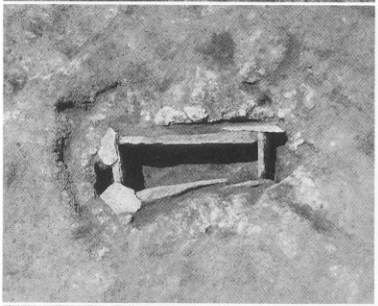
28

〔石棺墓〕



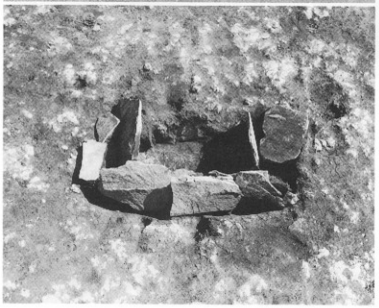
◁ＳＸ115（蓋石出土状況　北より）

１号墳の南側約15ｍに位置する。



◁ＳＸ115（石棺完掘状況　北より）

石棺の規模は内法で長さ55㎝・東小口幅19㎝・西小口幅16㎝、深さは側石上面より21㎝を測る。掘り方は２段になっており、上段は隅丸長方形、下段は長方形である。規模は上段が長軸106㎝・短軸78㎝、深さ６㎝を測り、下段は長軸78㎝・短軸32㎝、深さ20㎝を測る。蓋石は上段の掘り方内に収まる。副葬品は出土しなかった。



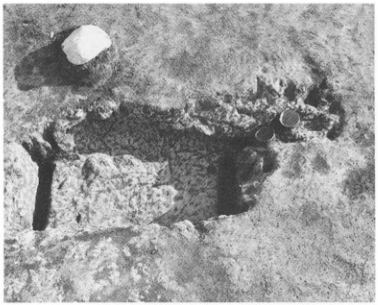
◁ＳＸ136（石棺完掘状況　東より）

３号墳の東側約1.4ｍに位置する。西側の側石が遺存していないが、推定される石棺の規模は、内法で長さ90㎝・幅30㎝、深さは側石の上面より20㎝を測る。掘り方は隅丸長方形で、規模は長軸123㎝・短軸70㎝、深さ１㎝を測る。副葬品は出土しなかった。

〔木棺墓〕

▷ S X88（北西より）

平面形は隅丸長方形で、規模は長軸170㎝・短軸93㎝、深さ30㎝を測る。掘り方の底部には、長軸121㎝・短軸60㎝の木棺痕跡を検出した。掘り方の南西隅に外側に向かって伸びる浅い溝が検出され、その中から須恵器坏蓋２点31・32が口縁を上向きにして供献状態で出土した。



▷ S X90（北より）

平面形は隅丸長方形で、規模は長軸89㎝・短軸34㎝、深さ23㎝を測る。土層断面に木棺痕跡が確認されたため、南小口のみに板石を配した木棺墓と思われる。木棺の規模は、長軸70㎝・短軸25㎝程度と推定される。木棺北側から須恵器坏身33が口縁部を上向きにした状態で出土した。

31

32

33

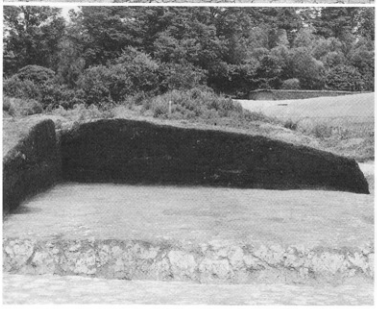
〔中世墳墓〕

◁３号墳墓（北より）

墳丘は方形で長軸11.2ｍ・短軸10.8ｍを測る。表土除去後の墳丘盛り土の高さは、旧地表面から0.9ｍであった。周溝は幅1.2～1.7ｍ・深さ0.4～0.6ｍを測る。主体部は確認されなかった。

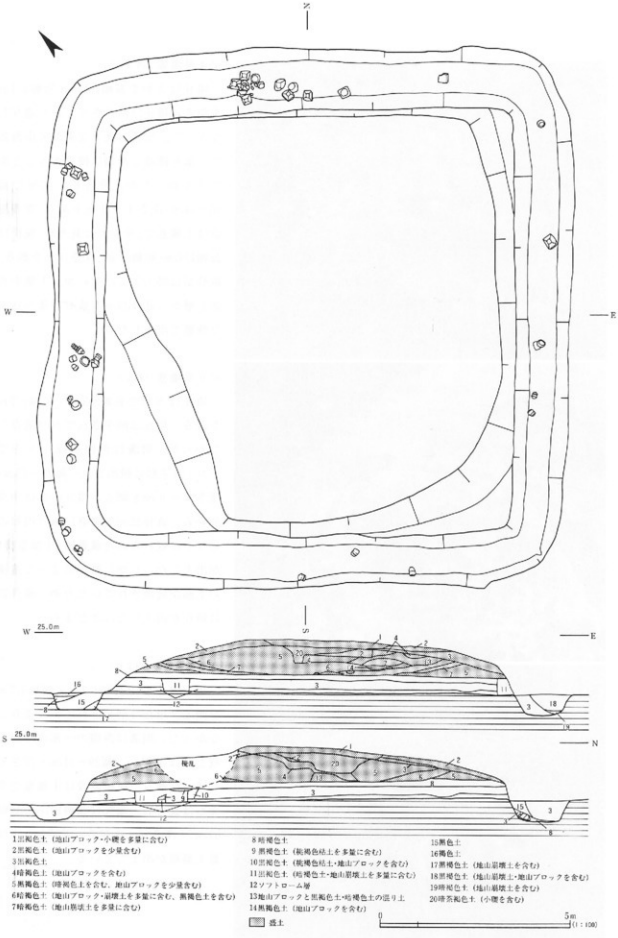
◁３号墳墓（周溝五輪塔出土状況　北より）

周溝底からは、空風輪・火輪を中心とした五輪塔の部材42個体が転落した状態で出土している。特に北辺、西辺からの出土が多くみられた。



◁３号墳墓（墳丘断面　西より）

墳丘盛土は主に黒色土で構成されており、周溝を掘りあげた際のローム土以外にも多量の土が周辺から集められてきたと思われる。この断面の上部中央には盗掘坑の跡がうかがえる。



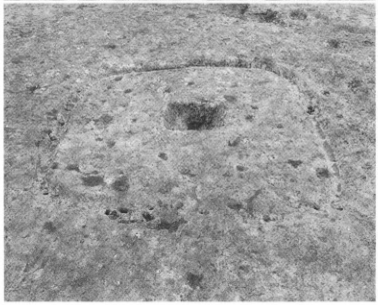
第10図　3号墳墓遺構図

◁４号墳墓（西より）

墳丘は方形で長軸4.2ｍ・短軸4.1ｍを測る。墳丘は削平されており遺存しなかった。周溝は浅く北東部と南西部で一部を確認した他は検出することができなかったが、検出した部分で幅40～54㎝・深さ１～５㎝を測る。埋葬施設は土壙墓で、平面形は長方形、規模は長軸134㎝・短軸60㎝、深さ18㎝を測る。副葬品は出土していないが、土壙中央部上層から直径33㎝の礫石が落ち込んだ状態で出土した。

◁９号墳墓（西より）

墳丘は方形で長軸3.3ｍ・短軸2.7ｍを測る。墳丘は削平されており遺存しなかった。周溝は西側を除く３方で「コ」の字形に検出され、幅21～25㎝・深さ６～８㎝を測る。墳丘のほぼ中央部から、直径29㎝・深さ13㎝の円形のピットに収められた蔵骨器（土師器甕）が出土した。しかし耕作によって遺構の上面が破壊されていたため、蔵骨器は破片が出土したにとどまる。



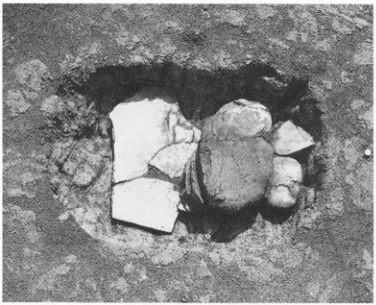
◁13号墳墓（西より）

墳丘は方形で長軸4.2ｍ・短軸3.7ｍを測る。墳丘は削平されており遺存しなかった。周溝は西側の一部に陸橋を残しほぼ全周し、幅29～31㎝・深さ６～18㎝を測る。埋葬施設は土壙墓で平面形は長方形、規模は長軸107㎝・短軸81㎝、深さ45㎝を測る。下層から土師質土器皿が出土している。

〔火葬墓〕

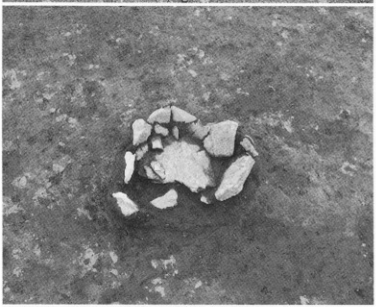
▷ S X08（西より）

集石の規模は長軸60cm・短軸49cmを測る。掘り方の平面形は長方形で、規模は長軸86cm・短軸62cm、深さ16cmを測る。埋土中から炭化物とともに骨片が出土した。副葬品は出土しなかった。



▷ S X123（南西より）

集石は平石を用いて箱式石棺状の構造をなし、規模は内法で長軸50cm・短軸45cm、深さ19cmを測る。黒色土中に造られていたため掘り方は確認できなかった。埋土中から炭化物とともに骨片が出土したが、副葬品は出土しなかった。



▷ S X127（東より）

集石には五輪塔の部材である空風輪2・火輪1・水輪1が含まれていた。規模は長軸87cm・短軸50～61cmを測る。掘り方の平面形は隅丸長方形で、規模は長軸105cm・短軸63cm、深さ8cmを測る。埋土中から炭化物とともに骨片が出土したが、副葬品は出土しなかった。

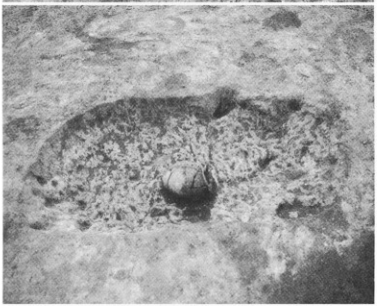
〔土壙墓（弥生時代）〕

◁ＳＸ104（北西より）

掘り方の平面形は楕円形で、規模は長軸165㎝・短軸77㎝、深さ65㎝を測る。中央部下層より弥生時代中期の甕34が出土した。

◁ＳＸ105（北より）

掘り方の平面形は楕円形で、規模は長軸134㎝・短軸75㎝、深さ20㎝を測る。中央部下層より弥生時代中期の甕35が出土した。



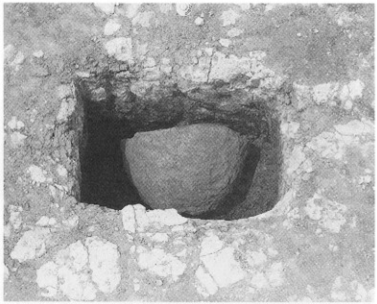
34

35

〔土壙墓（中近世）〕

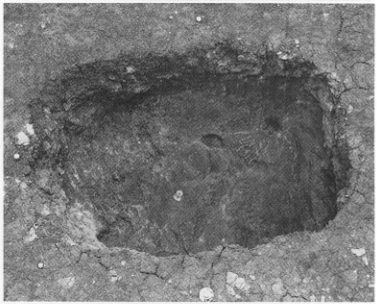
▷ S X32（東より）

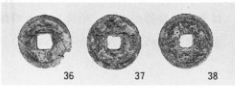
掘り方の平面形は長方形で、規模は長軸55㎝・短軸36㎝、深さ70㎝を測る。中央部上層より人頭大の石が出土した。また石の下からは明治７年鋳造の１銭銅貨が出土している。骨は検出できなかったが埋土に多量の炭化物が含まれていた。



▷ S X51（北西より）

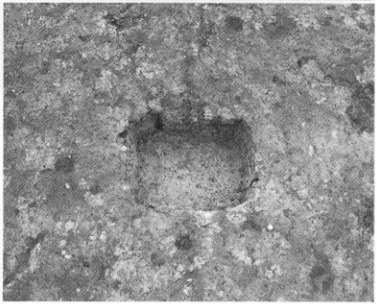
掘り方の平面形は隅丸長方形で、規模は長軸105㎝・短軸75㎝、深さ32㎝を測る。埋土はローム土と黒色土が混ざった埋め土である。中央部下層から古銭３点36～38が出土した。１点は「紹聖元宝」だが残り２点は腐食がひどく判読不能である。





▷ S X56（北より）

掘り方の平面形は隅丸長方形で、規模は長軸118㎝・短軸93㎝、深さ50㎝を測る。埋土はローム土と黒色土が混ざった埋め土である。中央部下層から古銭２点、土師質土器皿１点39が出土した。古銭は腐食がひどく判読不能である。

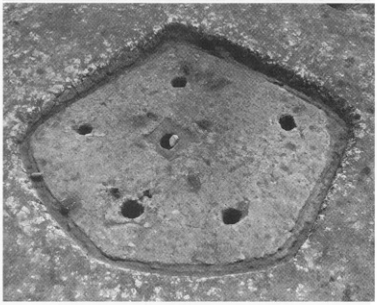


竪穴式住居址

C地区からは2棟の竪穴式住居址を検出した。いずれの住居も埋土中から多量の炭化物が出土したことから焼失住居址と考えられる。遺物の出土は多くないが、わずかに出土した土器から弥生時代後期の住居と考えられる。

◁ＳＩ04（北東より）

平面形は五角形で、５本の柱穴と１個の中央ピットが検出された。規模は東西径6.2ｍ・南北径6.7ｍを測る。遺物は弥生土器壺および高坏片が出土している。



◁ＳＩ05（北西より）

平面形は五角形で、５本の柱穴と１個の中央ピットが検出された。規模は東西径5.2ｍ・南北径5.2ｍを測る。遺物は弥生土器器台の他、中央ピットの縁から人頭大の平石が出土している。

堀

▷ＳＤ29（検出状況　北西より）

Ｃ地区からは、検出面の幅が８ｍの大型の堀が検出された。Ｃ地区の調査区際から約150ｍ南東のトレンチにおいてこの堀の延長部分を確認していることから、丘陵を横断する大規模なものであったと想定される。調査区外の竹林の一部には、土塁と思われる高まりが現存している。検出面からは五輪塔の石材が多数出土している。

▷ＳＤ29（南東部完掘状況　北西より）

ＳＤ29の北西部と南東部の調査区際を約２ｍ幅で掘り下げた結果、この堀は、上部と底部の比率がほぼ８：１の薬研堀であることがわかった。検出面からの深さは約４ｍだが、表土や土塁を含めると５ｍを優に越える深さとなる（右の写真のスタッフは５ｍ）。この堀に関連する遺構及び遺物はほとんど確認されていないが、堀の形状および出土遺物から室町時代のものと推定される。

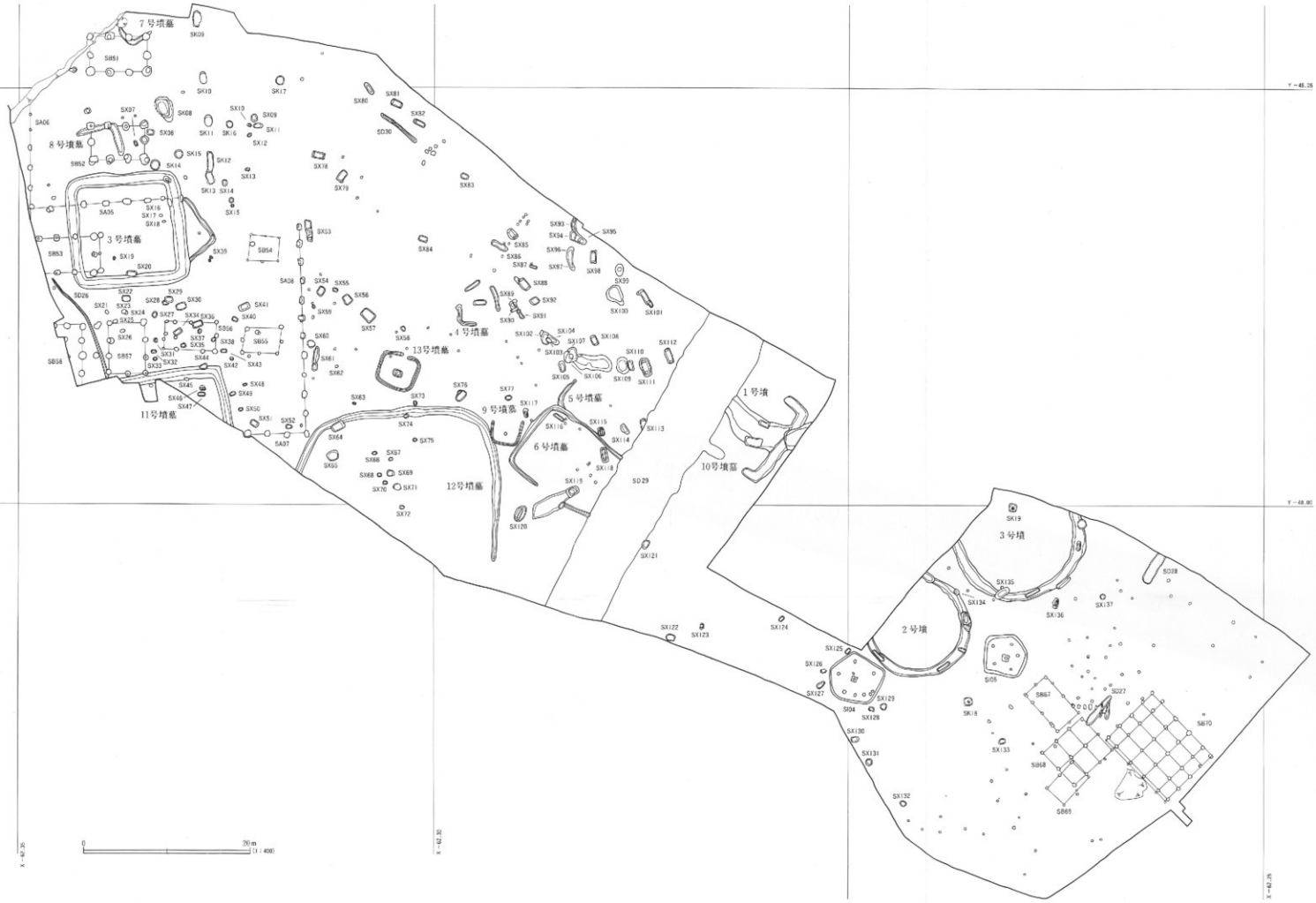
落し穴

▷ＳＫ19（東より）

平面形は隅丸方形で、規模は長軸96㎝・短軸94㎝、深さ80㎝を測る。底部には８本の杭を立てた痕跡が検出された。Ｃ地区からはこれとほぼ同形の落し穴がこのほかにもう１基検出されている。

（竹中）

不入岡遺跡現地説明会風景（平成6年3月19日）



第11図　不入岡遺跡C地区全体図

2．沢べり遺跡２次調査（D地区）

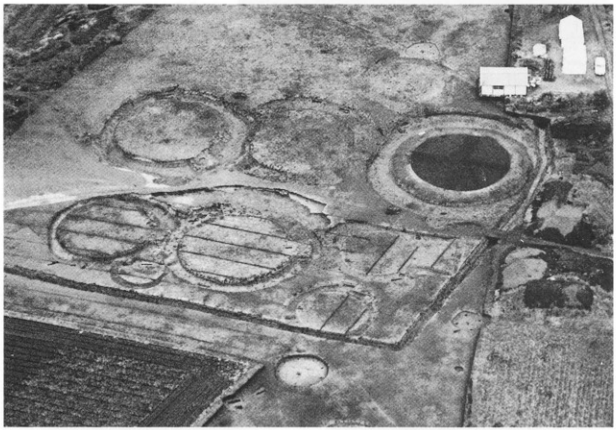
沢べり遺跡は、不入岡遺跡と同一丘陵の東端に位置しており、約400ｍ北東（標高20～24ｍ）に位置している。

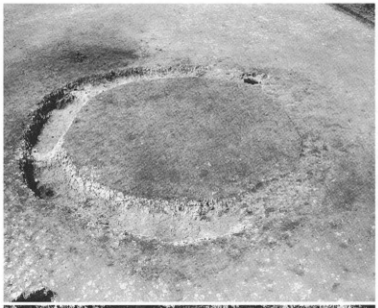
調査の結果検出した遺構は、竪穴式住居址10棟、掘立柱建物46棟、溝15条、古墳18基、その他の埋葬施設７基、貯蔵穴６基、落し穴４基を含む土壙15基であった。

古墳

沢べり遺跡では５世紀中頃～６世紀前半の古墳18基（帆立貝式古墳５基・前方後円墳１基・方墳１基・円墳11基）が検出された。これらは南側に13基（１～13号墳）、北側に５基（14～18号墳）の２つの古墳群に分かれ、帆立貝式古墳及び前方後円墳はすべて南側の古墳群に属する。また、南側の古墳群に属する10基の古墳は、５基ずつ丘陵を横断する形で２列に並行して造られている。なお、今回検出した古墳の墳丘は、全て削平されており遺存していなかった。古墳からは須恵器・土師器の土器の他、埴輪（円筒埴輪・壺形埴輪・形象埴輪）、銅鏡（獣帯鏡）などが出土している。

▽調査区南東部の古墳群（北東より）





◁１号墳（東より）

墳丘の直径が９ｍの円墳である。周溝は幅1.0～1.8ｍ・深さ0.1～0.4ｍを測り墳丘を全周する。周溝内埋葬施設１基が検出された。墳丘が削平されており、主体部は遺存しない。

◁２号墳（北西より）

南側の大部分は調査区外のため未調査だが、検出された部分から墳丘の直径が10ｍ程度の円墳と推定される。周溝は幅1.6～2.0ｍ・深さ約0.2ｍを測る。周溝内埋葬施設は検出されなかった。

40

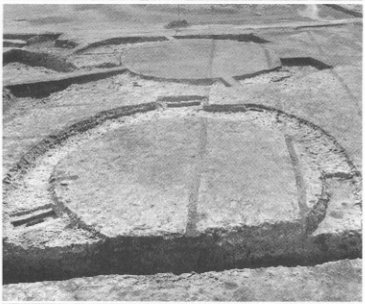
41

▷ 3号墳（西より）

南東部は調査区外のため未調査だが、検出された部分から墳丘の直径が14m程度の円墳と推定される。周溝は幅1.2～2.0m・深さ約0.2mを測る。周溝内埋葬施設3基が検出された。1号周溝内埋葬施設は、北小口と側板の一部に板石が遺存し、他の部分からは木棺痕跡が確認されたため、木と石を組み合わせた棺構造であると考えられる。規模は内法で長軸188cm・短軸61cm、深さ38cmを測る。棺内には、板石をV字状に組んだ枕がつくられていた。副葬品は出土しなかった。

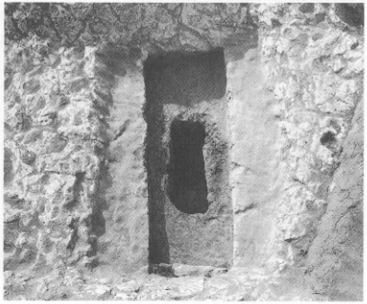
▷ 4号墳（北東より）

墳丘の直径が10mの円墳である。周溝は幅1.5～2.3m・深さ0.2～0.4mを測り墳丘を全周する。周溝内埋葬施設は3基検出された。墳丘が削平されており、主体部は遺存していない。



▷ 4号墳1号埋葬施設（南東より）

周溝内埋葬施設3基のうち2基は周溝に並行してつくられているが、1号周溝内埋葬施設は周溝に直交してつくられている。掘り方は二段になっており、規模は上段では長軸148cm・短軸141cm・深さ17cm、下段では長軸66cm・短軸56cm・深さ19cmを測る。



◁５号墳（北西より）

墳丘の全長が20ｍの帆立貝式古墳である。周溝は幅2.6～2.9ｍ・深さ0.6～0.7ｍを測り墳丘を全周する。前方部は、長さ2.0ｍ・最大幅3.6ｍ・最小幅3.1ｍを測る。埋葬施設は前方部上に１基、周溝内に５基検出された。墳丘は削平されており、主体部は遺存しない。周溝内からは、装飾須恵器・壺型埴輪・円筒埴輪が出土している。また、周溝内攪乱土中より直径13㎝の獣帯鏡が出土している。

◁５号墳６号埋葬施設（北西より）

前方部上の６号埋葬施設は、箱式石棺墓だが、石棺は破壊が激しくほとんど遺存していなかった。規模は長軸116㎝・幅54㎝、深さ32㎝を測る。

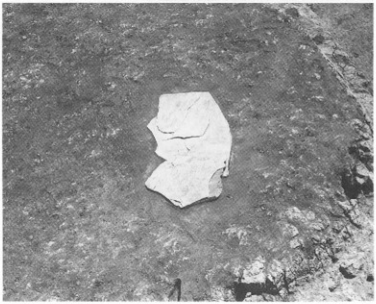
42

▷６号墳（北西より）

墳丘の直径が６ｍの円墳である。周溝は幅1.7～2.5ｍ・深さ0.4～0.6ｍを測り、墳丘を全周する。

▷６号墳主体部（検出状況　北西より）

主体部は石蓋土壙墓で、墳丘中央よりやや南西側に位置している。規模は長軸164㎝・短軸37㎝、深さ34㎝を測る。



44

43

◁７号墳（北西より）

墳丘の全長が17ｍの帆立貝式古墳である。周溝は幅1.4～1.8ｍ・深さ0.4～0.8ｍを測り墳丘を全周する。前方部は、長さ1.8ｍ・最大幅2.4ｍ・最小幅2.3ｍを測る。埋葬施設は前方部上に１基、周溝外に３基検出された。墳丘が削平されており、主体部は遺存しない。出土遺物として、壺型埴輪・円筒埴輪・人物埴輪がある。

◁７号墳人物埴輪出土状況（南東より）

人物埴輪は２個体確認されており、周溝内より横転した状態で出土している。１体は、背面に鹿の子模様が施されている。美豆良が表現されていることから男性と考えられる。鹿の子模様の施される人物埴輪は、全国では鳥取県東伯郡北条町土下211号墳出土の埴輪についで２例目である。

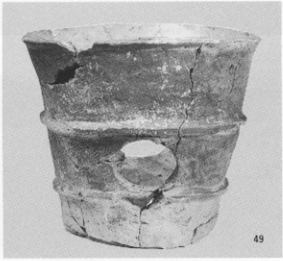
45

46

47

47の背面

48



49

◁８号墳（北西より）

墳丘の全長が18ｍの前方後円墳である。周溝は幅1.6～1.7ｍ・深さ0.3～0.5ｍを測り墳丘を全周する。埋葬施設は周溝内に２基検出された。墳丘が削平されており、主体部は遺存しない。また、前方部には設計溝が検出された。規模は幅約3.6ｍ・深さ約0.1ｍを測る。周溝内より、壺型埴輪・円筒埴輪が出土している。

◁９号墳（東より）

墳丘の直径が21ｍの円墳である。周溝は幅2.5～4.0ｍ・深さ0.5～0.7ｍを測り墳丘を全周する。墳丘裾部分からは設計溝が検出された。埋葬施設は設計溝内に４基、周溝内に３基検出された。墳丘が削平されており、主体部は遺存しない。周溝内から、壺型埴輪・円筒埴輪が出土している。

◁10号墳（北より）

墳丘の全長が21ｍの帆立貝式古墳である。周溝は幅3.9～4.0ｍ・深さ0.1～0.3ｍを測る。前方部は、長さ3.2ｍ・最大幅8.0ｍ・最小幅4.1ｍを測り、陸橋状を呈する。埋葬施設は周溝内に２基、周溝外に１基検出された。墳丘が削平されており、主体部は遺存しない。

50

52

51

53

54

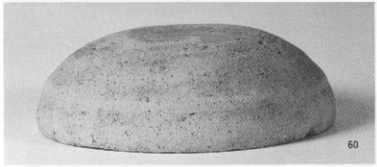
56

55

57

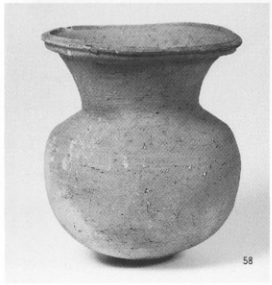
◁11号墳（北より）

墳丘の全長が20ｍの帆立貝式古墳である。周溝は幅1.6～4.0ｍ・深さ0.6～1.3ｍを測り、墳丘を全周する。前方部は、長さ3.1ｍ・最大幅3.1ｍ・最小幅2.1ｍを測る。埋葬施設は前方部上に1基、周溝内に2基、周溝外に2基検出された。墳丘が削平されており、主体部は遺存しない。



60

61



58

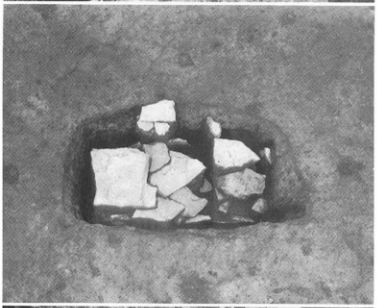
59

▷12号墳（北より）

墳丘の全長が13ｍの帆立貝式古墳である。周溝は幅2.4～2.5ｍ・深さ0.1～0.4ｍを測り墳丘を全周する。前方部は、長さ1.1ｍ・最大幅4.8ｍ・最小幅2.8ｍを測る。埋葬施設は周溝内に２基、周溝外に１基検出された。墳丘が削平されており、主体部は遺存しない。

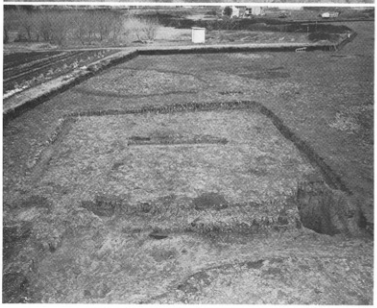
▷13号墳主体部（南東より）

13号墳は北西・北東部は調査区外のため未調査だが検出された部分から墳丘の直径が６ｍの円墳と推定される。周溝の幅0.7ｍ・深さ0.1ｍを測る。主体部は箱式石棺墓だが、破壊が激しくほとんど遺存していなかった。周溝外からは埋葬施設１基が検出された。



▷14号墳（西より）

一辺が12ｍの方墳である。周溝は幅0.7～1.6ｍ・深さ0.2～0.6ｍを測る。主体部は割竹形木棺墓で、規模は長軸466㎝・短軸48㎝、深さ24㎝を測る。墳丘上と周溝内から土器棺墓が１基ずつ検出され、周溝外埋葬施設１基も検出された。

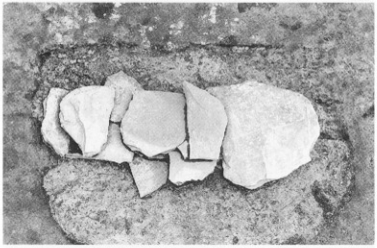


◁15号墳（西より）

墳丘の直径が９ｍの円墳である。周溝は幅1.3～1.4ｍ・深さ0.1ｍを測り、墳丘東側の斜面の高い側を半円形にめぐる。墳丘が削平されており、主体部は遺存しない。

◁16号墳（西より）

墳丘の直径が12ｍの円墳である。周溝は3.2～4.4ｍ・深さ0.5ｍを測り、墳丘東側の斜面の高い側を半円形にめぐるが、これはカスガイ状の周溝を円形に変形したもので、このため方墳を円墳に変形しているものと考えられる。主体部は箱式石棺墓で墳丘のほぼ中央に位置する。他に周溝内埋葬施設３基が検出されている。

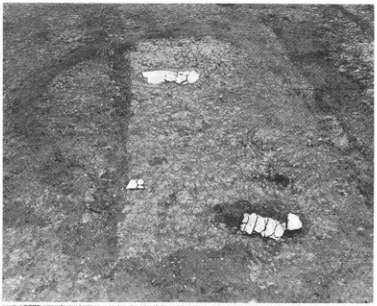


◁16号墳主体部（検出状況　西より）

主体部の規模は内法で長軸183cm・短軸51cm・深さ28cmを測る。副葬品としては鉄刀・鉄剣が出土した。また、遺骨も頭部の一部が遺存していた。板石をＶ字状に組み合わせた枕と副葬品が上下二層にわかれて出土したことから、この主体部は追葬が行われたと考えられる。

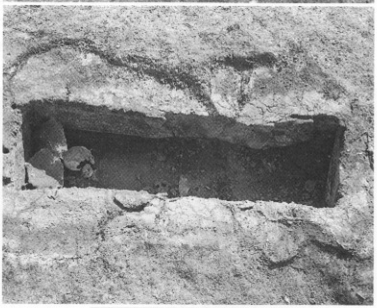
▷17号墳（西より）

墳丘の直径が10ｍの円墳である。周溝は1.0～1.7ｍ・深さ0.1～0.3ｍを測り、墳丘東側の斜面の高い側を半円形にめぐる。主体部は箱式石棺墓で墳丘のほぼ中央に位置する。他に周溝内埋葬施設７基、周溝外埋葬施設１基が検出された。６号埋葬施設では、副葬品として玉・管玉が出土している。



▷17号墳主体部（蓋石除去後　北西より）

主体部の規模は内法で長軸178㎝・短軸48㎝、深さ38㎝を測る。棺内には板石をＶ字状に組んだ枕が造られており頭蓋骨の一部が遺存していたが、副葬品は出土しなかった。



18号墳

撹乱が著しいため、周溝の1/5を検出したのみに止まる。検出された部分から９ｍ程度の円墳と推定される。墳丘が削平されており、主体部は遺存しない。

（岡本）

62

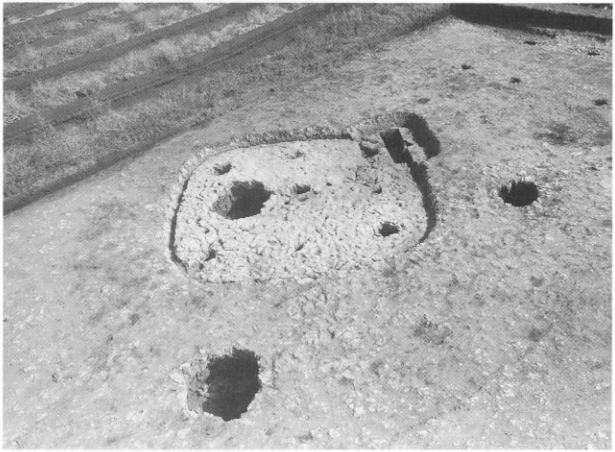
集落址

沢ベリ遺跡からは竪穴式住居址10棟が確認されている。出土した遺物から住居はすべて弥生時代後期に建てられたものと考えられる。住居周辺からは掘立柱建物が46棟検出されているが、このうち不入岡遺跡の大型建物群と同時期の８～９世紀と考えられる６棟を除く40棟については、柱穴からの出土遺物が弥生土器に限定されること、住居址付近からまとまって検出されていることなどから、住居に付随する倉庫の可能性が高いと思われる。また住居址周辺からは、貯蔵穴７基が確認されている。

沢ベリ遺跡の周辺には、中峯遺跡・中尾遺跡・イザ原古墳群など弥生時代の集落遺跡が多く、周辺の未調査地区にも集落の広がりが予想されている。

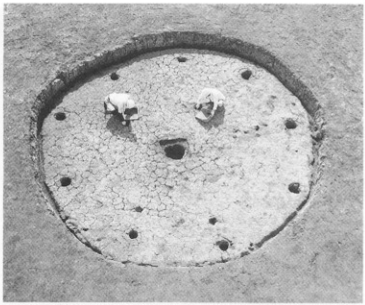
▽ＳＩ01（西より）

平面形は隅丸方形で、床面の規模は東西径5.6ｍ・南北径5.2ｍを測る。主柱穴は４本だが、各主柱穴間には４本の補助柱穴が確認された。住居址の北東部には屋内貯蔵穴が作られており、その規模は開口部で直径約1.2ｍ、底面で直径約1.6ｍ・深さは1.0ｍであった。この住居址は火災を受けており、多量の炭化した建築材とともに弥生土器壺・小壺・甕・器台等多数の土器とガラス製小玉２点が出土している。また住居北西肩から約1.5ｍの位置と南西肩から約1.3ｍの位置には貯蔵穴が１基ずつ作られていた。住居址南東部に埋葬施設が設けられているが、これは住居址廃絶後の古墳時代中期に造られたもので、住居の機能と直接関係はない。



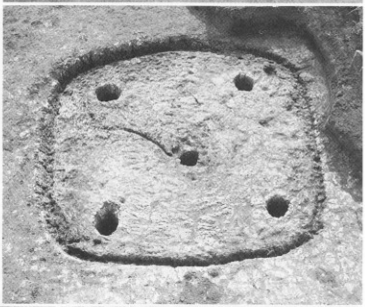
▷ S I 02（北東より）

平面形は円形に近い九角形で、９本の柱穴と中央ピットが検出された。床面の規模は東西径7.7ｍ・南北径7.3ｍを測る大型の竪穴式住居址である。検出面からの壁高も50cmと他の住居址に比べてかなり深い。遺物は弥生土器壺・甕・蓋・高坏等比較的多量の土器片が出土している。



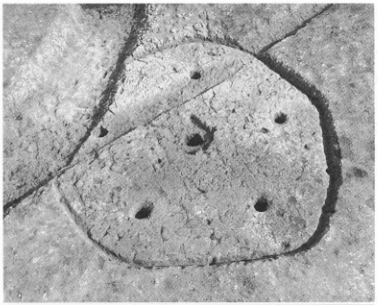
▷ S I 03（北東より）

平面形は隅丸方形で、４本の柱穴と中央ピットが確認された。床面の規模は東西径4.0ｍ・南北径4.1ｍを測る。柱穴には柱を固定するために桃褐色粘土が用いられており、柱の跡には表土である黒褐色土が円柱状に流入していた。そのため柱の形が黒とピンク色のコントラストで明示されており、この住居址に使われていた柱は直径18cm程度の丸太材であることがわかった。遺物は少なく、弥生土器数片が出土しているのみである。



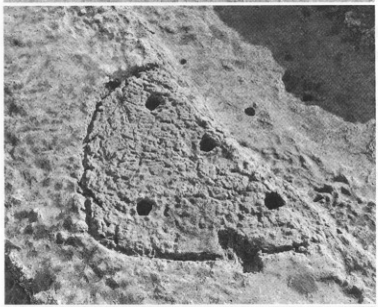
△SI03ピット３（東より）

△SI03ピット３（西より）



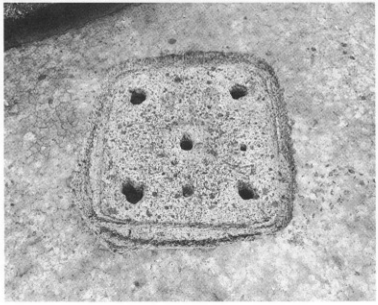
◁ＳＩ04（西より）

平面形は五角形で、５本の柱穴と１個の中央ピットが検出された。12号墳に住居址東側の一部を切られているため全体の規模は不明だが、床面の規模は東西径5.3ｍ・南北径5.0ｍ強と推定される。ＳＩ01と同じくこの住居址も焼失住居で、建築材の炭化物が多量に出土したが遺物は多くなく、弥生土器甕等の少数の土器片の他、人頭大の礫石が出土しているのみである。



◁ＳＩ06（北より）

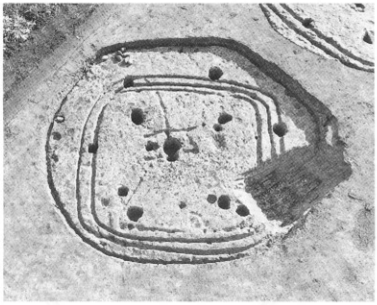
平面形は隅丸方形で、４本の柱穴と１個の中央ピットが検出された。９号墳に切られているため正確な規模は不明だが、径４ｍ程度の中規模の住居と推定される。遺物は弥生土器１片が出土したのみである。



◁ＳＩ07（南西より）

４期にわたる建物の建替の跡が確認された。平面形は１～３期が隅丸方形、４期は変形の五角形となる。規模は最小の１期で東西径3.9ｍ・南北径3.7ｍ、最大となる４期で東西径4.4ｍ・南北径4.2ｍを測る。床面からは４本の柱穴と１個の中央ピットが検出された。やや南西方向に位置をずらしながら１～４期を通じて、同じ柱穴を共有する。遺物は弥生土器壺・台付壺・甕・高坏・器台・ミニチュア土器の台部の他、大型石庖丁64が出土している。

▷ＳＩ09（北より）

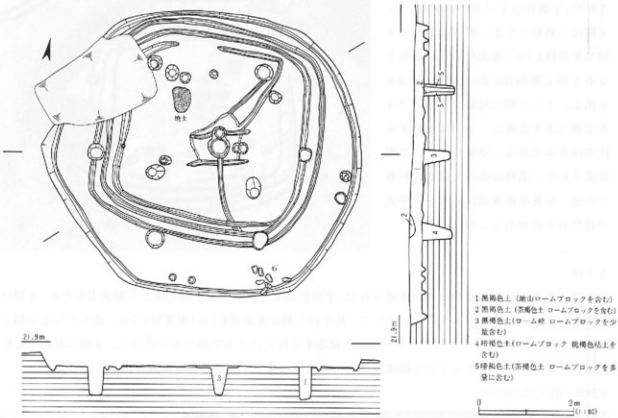


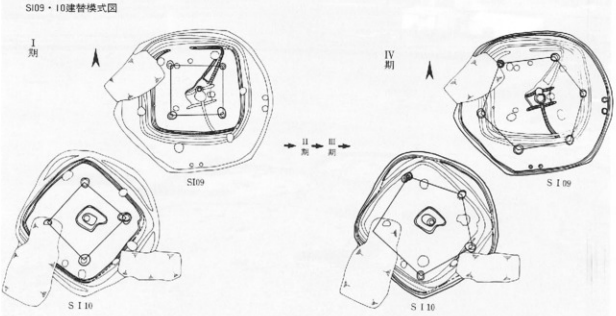
４期にわたる建物の建替の跡が確認された。平面形は１～３期が隅丸方形、４期は六角形となる。規模は最小の１期で東西径3.7ｍ・南北径3.6ｍ、最大となる４期で東西径6.2ｍ・南北径5.8ｍを測る。１～３期に対応する柱穴は４本で掘り方を共有し、４期に対応する柱穴は６本である。中央ピットは２個確認された。遺物は弥生土器壺・甕・器台の他、住居址南東部に集中して拳大の自然石８点が出土した。

ＳＩ10

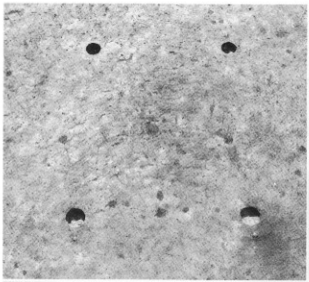
４期にわたる建物の建替の跡が確認された。平面形は１～３期がＳＩ08と同じく隅丸方形だが、４期は五角形となる。規模もＳＩ08とほぼ同じで、最小の１期が東西径4.1ｍ・南北径4.1ｍ、最大となる４期で東西径5.6ｍ・南北径5.7ｍを測る。１～３期に対応する柱穴は４本で掘り方を共有し、４期に対応する柱穴は５本である。中央ピットは２個確認された。遺物は弥生土器甕等の土器片が出土している。

▽SI08・09・10（西より）

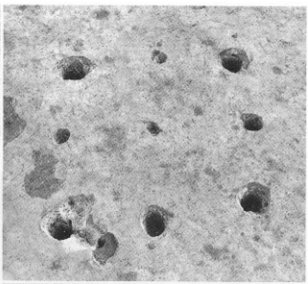




第12図　SI09遺構図

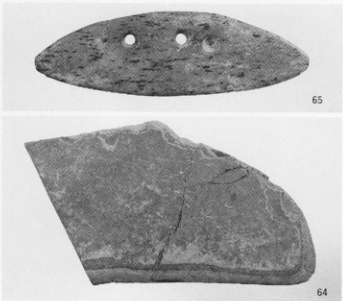


△SB15（北より）
▽SK07（西より）



△SB34（北東より）
▽SK04（北より）

63



65

64

落し穴

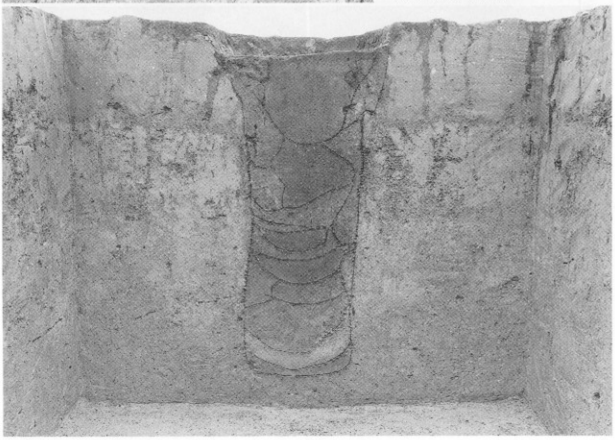
沢べり遺跡で確認された4期の落し穴に共通して特徴的な事は、埋土にソフトロームが多量に流入していたことである。ソフトロームとは表土であるクロボク(黒褐色土)の下に堆積する土で、旧石器時代の終わり頃に形成されたものと推定されている。遺物としてはSK12から微量の炭化物が出土したにとどまるため正確な製作年代を知ることは難しいが、埋土の性格から全国的にみてもかなり古い時代に作られたものと思われる。平面形は円形3基、楕円形1基、深さは111～149cmを測る。4期とも底部の杭痕跡は確認されなかった。

◁SK07（東より）

平面形は楕円形で、規模は長径108cm・短径74cm、深さ149cmを測る。遺物は全く出土しなかった。

（竹中）

▽SK07（断面　南より）



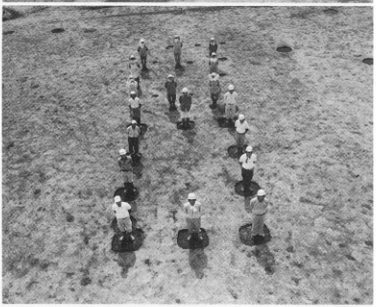
掘立柱建物・堀

▷ＳＢ05～10（北より）

沢べり遺跡で検出した掘立柱建物のうち、ＳＢ05～10は北側調査区の西側に位置する。いずれも南北棟で、ＳＢ05・08～10の柱穴は径90㎝前後、深さ60㎝前後の方形から円形の掘り方を有しており、不入岡遺跡Ｂ・Ｃ地区の掘立柱建物群Ⅱ期のものによく似る。このことからＳＢ05～10は不入岡遺跡の掘立柱建物群に関連のあるものと考えられる。

▷ＳＢ05・06（北より）

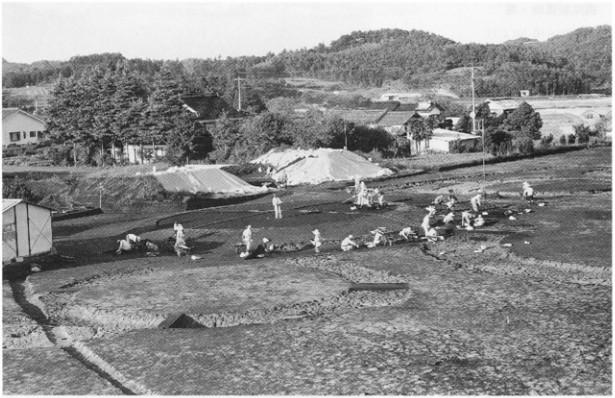
ＳＢ05は梁行２間（3.6ｍ）・桁行３間（6.0ｍ）の南北棟建物。柱穴は径約90㎝・深さ約60㎝の方形の掘り方を有する。ＳＢ06はＳＢ05の南1.4ｍに位置し、東側柱筋を揃える。建物規模は梁行２間（3.5ｍ）・桁行２間（5.2ｍ）で、南北棟建物である。柱穴は小型で、径30㎝・深さ20㎝の円形を呈しており、小型である。



▷ＳＤ05（西より）

沢べり遺跡では溝を15条検出しているが、そのうちＳＤ01・02・05・06・08は遺構検出面からの深さが1.0～1.5ｍの逆台形の掘り方を有する大規模なものである。いずれも遺物はほとんど出土しておらず、形状が似ることからこれらは同様の性格を有するものと考えられる。溝の時代を決定できる遺物はほとんど出土していないが、ＳＤ06から出土した瓦器鍋から鎌倉時代末期のものと考えられる。

（竹宮）



沢べり遺跡発掘調査風景

第13図　沢べり遺跡全体図

遺物一覧表

No.	遺跡	遺構	遺物	頁	No.	遺跡	遺構	遺物	頁
1	不入岡 B	S D01	土師器 皿	15	34	不入岡 C	S X104	弥生土器 甕	32
2		S D01	土師器 台付坏	15	35		S X105	弥生土器 甕	32
3		S D01	須恵器 壺	15	36		S X51	古銭	33
4		S D01	須恵器 壺	15	37		S X51	古銭	33
5		S D01	須恵器 壺	15	38		S X51	古銭	33
6		S D01	須恵器 坏	15	39		S X56	土師質土器 皿	33
7		S D01	須恵器 坏	15	40	択ぐり	1号墳墳麓	須恵器 坏蓋	40
8		S D02	土師器 甕	14・15	41		1号墳墳麓	須恵器 坏身	40
9		S D03	土師器 坏	15	42		5号墳周溝	獣帯鏡	42
10		S D03	土師器 坏	15	43		5号墳周溝	須恵器 高坏	43
11		S D03	土師器 坏	15	44		5号墳1号埋葬	須恵器 壺	43
12		S D03	土師器 坏	15	45		7号墳周溝	土師器 直口壺	44
13		S D03	土師器 坏（墨書）	15	46		7号墳周溝	土師器 台付埦	44
14		S D03	土師器 坏（墨書）	15	47		7号墳周溝	人物埴輪	45
15		S D03	土師器 坏（墨書）	15	48		7号墳周溝	人物埴輪	45
16		S D03	土師器 皿	15	49		7号墳周溝	円筒埴輪	45
17		S D04	土師器 皿	15	50		9号墳5号埋葬	須恵器 坏蓋	47
18		S D04	土師器 鉢	15	51		9号墳5号埋葬	須恵器 坏身	47
19		S B36付近表土	須恵器 円面硯	15	52		10号墳1号埋葬	須恵器 坏蓋	47
20		中央	須恵器 坏	15	53		10号墳1号埋葬	須恵器 坏身	47
21		S I 03	土師器 甑	17	54		10号墳2号埋葬	須恵器 坏蓋	47
22		S I 03	土師器 甕	17	55		10号墳2号埋葬	須恵器 坏身	47
23		S I 03	土師器 甕	17	56		10号墳3号埋葬	須恵器 坏蓋	47
24		S I 03	土師器 高坏	17	57		10号墳3号埋葬	須恵器 坏身	47
25	不入岡 C	南側	土師器 鉢（墨書）	15・22	58		11号墳周溝	須恵器 壺	48
26		2号墳周溝	土師器 台付埦	25	59		11号墳周溝	須恵器 高坏	48
27		2号墳2号埋葬	須恵器 高坏	25	60		12号墳1号埋葬	須恵器 坏蓋	48
28		3号墳周溝	土師器 小型丸底壺	25	61		12号墳1号埋葬	須恵器 坏身	48
29		3号墳周溝	土師器 高坏	25	62		15号墳周溝	土師器 壺	51
30		3号墳2号埋葬	須恵器 坏蓋	25	63		S I 01	弥生土器 壺	57
31		S X88	須恵器 坏蓋	27	64		S I 07	石鏃丁	57
32		S X88	須恵器 坏蓋	27	65		S K09	石鏃丁	57
33		S X90	須恵器 坏身	27					

図書館

郷土資料室
210.2
Kur
(83)

報告書抄録

書名	木入岡遺跡群発掘調査概報
副書名	不入岡遺跡・沢べり遺跡2次調査
巻次	
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書
シリーズ番号	第83集
編著者名	竹宮亜也子・竹中孝浩・岡本智則
編集機関	倉吉市教育委員会
所在地	〒682 鳥取県倉吉市東町722番地 TEL0858-22-8111
発行年月日	西暦1995年3月20日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡記号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
木入岡遺跡	倉吉市木入岡字大林、堀	31203：6WFF	35°26'14"	133°48'14"	19930712～19940510 19940418～19940708	22,000	国府地区農業集落整備事業に伴う事前調査
沢べり遺跡	倉吉市木入岡字沢べり	31203：4DFS・2	35°26'25"	133°48'23"	19940712～19950310	15,500	

所収遺跡名	種別	主な時代：主な遺構	主な遺物	特記事項
不入岡遺跡	官衙	奈良～平安：掘立柱建物 55棟 溝 4条 柵（塀） 8列	弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・羽釜・五輪塔・古銭	区画施設を伴う大型掘立柱建物群を確認。 伯耆国管轄の物資収納施設か。
	古墳	古墳：古墳 3基 石棺墓 3基 木棺墓 14基		弥生時代から近代に至る長期間にわたる墳墓群。
	墓	弥生～近代：土壙墓 108基 火葬墓 10基		
		中世：墳墓 13基		
	集落	弥生～奈良：竪穴式住居址 5棟 掘立柱建物 9棟		古墳時代の住居址では竈を検出している。
		中世：溝（堀） 1条		
沢べり遺跡	古墳	古墳：古墳 18基	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・羽釜・鞴羽口・銅銭・石錘	前方後円墳1基、帆立貝式古墳5基、円墳11基、方墳1基を検出。 羽口は2体の人物羽口も出土している。
	集落	弥生：竪穴式住居址 10軒 掘立柱建物 40棟		
		中世：溝（堀） 5条		

不入岡遺跡群発掘調査概報

不入岡遺跡・沢ベリ遺跡2次調査

平成7年3月20日　印刷
平成7年3月20日　発行

編集
発行　倉吉市教育委員会
印刷
製本　山本印刷株式会社